

# プロコピオス『秘史』——翻訳と註(1)

橋川裕之・村田光司

プロコピオスのアネクドタと呼ばれる書物は、皇帝ユスティニアヌスと彼の妻テオドラ、そしてベリサリオスその人と彼の妻への非難および喜劇を含む。

『スーダ』

## 端書

我々が訳出を試みたのは、6世紀の東ローマの歴史家、ケサリアのプロコピオスの『秘史』である。約半世紀にわたって「ローマ人の国家」に君臨した皇帝ユスティニアヌス1世(在位527-65年)とその妃テオドラ、そして彼らの帝国支配を支えた側近らに対し、徹底的で、苛烈とすら言えるほどの批判が繰り返されている、この異色の歴史書は、4世紀ほど前までごく限られた読者しか持たずにいた。テキストを収録したビザンツ期の写本はこれまで3点しか確認されておらず、史料での直接の言及も10世紀ごろに編纂された辞書『スーダ』まで現れない<sup>(i)</sup>。ヨーロッパでもその存在はほとんど知られていなかったが、1623年、ヴァチカンの文書管理官であったニコロ・アレマンニがヴァチカンの一写本(Codex Vaticanus Graecus 1001)を見出し、ギリシャ語テキストをラテン語訳とともに出版して以降、それはユスティニアヌス治世の「裏面」を伝える特異な史書として、好古家や歴史家から特別の注目を集めることになった。アレマンニが自らの刊本に付した「アネクドタあるいは秘史」(Anecdota seu Arcana Historia)にちなみ、この歴史書はヨーロッパ内外で「アネクドタ」ないし「秘史」と広く呼ばれるようになり、アレマンニのそれを含め、20世紀に入るまでに6冊もの刊本が出版された。近代語訳としては1669年のL・モージェによるフランス語訳を皮切りに、ヨーロッパのあらかたの主要言語への翻訳がすでになされている。

プロコピオスの『秘史』は、ユスティニアヌス時代を学ぶうえで、また古代末期以降のギリシャ語歴

史叙述の流れを把握するうえで、きわめて貴重かつ著名なテキストでありながら、わが国ではいまだ全訳がなされていない。この空白ないし不在を埋めることを我々はわが国のビザンツ史家としての急務とみなし、アッティカ体で書かれたプロコピオスの個性的な原文になるべく忠実かつ正確な日本語訳の作成を企図した。全部で30章からなる作品のうち、本号で訳出するのは1章から10章までであり、11章以降の訳は次号に掲載する予定である。なお我々が翻訳にあたって参照した批判校訂版は、1963年に刊行されたJ・ハウリとG・ヴィルトによるものである<sup>(ii)</sup>。

詳細な解説は別の場に譲ることとして、ごく手短かにプロコピオスとその作品について触れておくと、彼は500年ごろにパレスチナの都市ケサリアに生まれ、おそらくは哲学を含む高等教育を受けた後、弁護士となる道を選び、ある段階で、ユスティニアヌスの腹心的将軍ベリサリオスの法務秘書官となった<sup>(iii)</sup>。その後、彼はベリサリオスと長期間行動をとるに、ペルシャ国境、北アフリカ、イタリアを舞台に、ベリサリオスが采配をふるった数々の戦争を直接目撃した。これらの経験と見聞をもとに書かれたのが、全8書からなる『戦史』であり、補遺として書かれた最後の書を除く7書は、ユスティニアヌスが帝国の各地で推し進めた戦争の公的レポートの性格を持っている。プロコピオス自身が示すように、『秘史』は『戦史』への別種の補遺として書かれたものであり、『戦史』が公的レポートであれば、『秘史』はユスティニアヌスが存命の間は門外不出を固く定められた、文字通り秘密のレポートであり、皇帝権力の恐怖を熟知する彼が、秘密裏に執筆を進めることで発言の自由を最大限に行使した、「真相」暴露の史書であった。むろん、彼の提示する「真相」はあくまで彼、プロコピオスにとっての「真相」であり、読み手は十分な慎重さをもつ

て、彼のレトリックの技法や創作の度合いを判断する必要がある。彼には『建築』と呼ばれるもう一つの作品もあり、これはアヤ・ソフィアを含め、ユスティニアヌスの命令で造られた帝国の数々の建築物への賛辞をつづったものである。プロコピオスはこれらの作品のほかに、教会の問題に焦点を当てた『教会史』の執筆を構想していることをたびたびほめかしているが、結局、彼はこの作品を書くことなく亡くなったと思われる。プロコピオス自身に関する証拠は、実質、彼の3つの作品しかなく、彼がどのような交友関係を持ち、どのような家庭を築いたのか、ベリサリオスの秘書官以外ではどのような官職を務めたのか、どのような晩年を過ごしたのかといった、実生活上の点はまったく不明である。

表記への註として、我々は基本的に、固有名詞については当時の発音に近いカタカナ表記を用いた。すなわち、当時のギリシャ語の発音は、古典期のそれよりも、近代語のそれに近いものに変化しており、後者の発音に近い表記を優先したということである<sup>(iv)</sup>。ただし、皇帝の名についてはラテン語表記が一般的であることからラテン語のカタカナ表記とした（たとえば、Ιουστινιανός は、ユスティニアノスではなく、ユスティニアヌス）。地名についても、一般になじみがあると思われるものについてはその表記を用いた（たとえば、Ἀντιοχεια は、アンティオヒアやアンディオヒアではなく、アンティオキア）。

### 主要な校訂版

- N. Alemanni, *Procopii Caesariensis Anecdota seu Arcana Historia, qui est liber nonus Historiarum* (Lyons, 1623).
- I. Eichel von Rautenkron, *Procopii Caesariensis Anecdota seu Arcana Historia, qui est liber nonus Historiarum* (Helmstadt, 1654).
- C. Maltret, *Procopii Caesariensis Anecdota seu Arcana Historia, qui est liber nonus Historiarum* (Paris, 1663; Venice, 1721).
- W. Dindorf, *Procopii Caesariensis, vol. 3: De historia arcana* (Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae; Bonn, 1838).
- M. Krasheninnikov, *Procopii Caesariensis Anecdota quae dicuntur* (Yuriev, 1899).
- J. Haury, *Procopii Caesariensis Opera Omnia, vol. 3: Historia quae dicitur arcana* (Bibliotheca Teubneriana; Leipzig, 1906).
- J. Haury, *Procopii Caesariensis Opera Omnia, vol. 3: Historia quae dicitur arcana. Editio stereotype correctior, addenda et corrigenda adiecit G. Wirth* (Bibliotheca Teubneriana; Leipzig, 1963).

### 翻訳

#### ラテン語

N. Alemanni; I. Eichel von Rautenkron; C. Maltret; W. Dindorf. (「主要な校訂版」を参照)

#### フランス語

- L. Mauger, *Histoire secrète* (Paris, 1669)
- F.A. Isambert, *Anekdotia ou histoire secrète de Justinien, traduite de Procope, avec notice sur l'auteur et notes philologiques et historiques* (Paris, 1856).
- P. Maraval, *Histoire secrète. Suivie de «Anekdotia» par Ernest Renan* (Paris, 1990).

#### 英語

- The Secret History of the Court of the Emperor Justinian* (Printed for John Barksdale; London, 1674).
- The Athenian Society, *Procopius, Literally and Completely Translated from the Greek for the First Time* (Athens, 1896).
- R. Atwater, *Secret History* (Chicago, 1927).
- H.B. Dewing, *Procopius, vol. 6: The Anecdota or Secret History* (The Loeb Classical Library; London, 1938).
- G.A. Williamson, *The Secret History* (Penguin Classics; London, 1966).
- G.A. Williamson and P. Sarris, *The Secret History* (Penguin Classics; London, 2007).
- A. Kaldellis, *The Secret History with Related Texts* (Indianapolis, 2010).

#### ドイツ語

- P. Reinhard, *Geheimgeschichte* (Erlangen-Leipzig, 1753).
- E. Fuchs, *Die Anekdotia des Prokopios. Geheimgeschichte einer Tyrannis* (Vienna, 1946).
- O. Veh, *Anekdotia* (Munich, 1970).

O. Veh, *Anekdoti. Geheimgeschichte des Kaiserhofs von Byzanz*, with commentary by M. Meier and H. Leppin (Düsseldorf, 2005).

### イタリア語

D. Comparetti, *Le inedite libro nono delle istorie di Procopio di Cesarea* (Rome, 1928).  
 G. Astuti, *La storia arcana* (Rome, 1944).  
 V. Panunzio, *Storia segreta* (Rome, 1945).  
 G. Cutolo, *Storia arcana* (Novara, 1969).  
 F.M. Pontani, *Storia segreta* (Rome, 1972).  
 F. Ceruti, *Storia inedita* (Milan, 1977).  
 L.R. Cresci Sacchini, *Carte segrete* (Milan, 1977).  
 P. Ottavio, *La storia arcana* (Perugia, 1977).  
 F. Conca and P. Cesaretti, *Storie segrete* (Milan, 1996).

### ロシア語

S.P. Kondratiev, « Тайная история », *Вестник древней истории* 4 (1938), pp. 273-360.  
 A.A. Chekalova, *Война с персами. Война с вандалами. Тайная история* (Moscow, 1993).

### 現代ギリシャ語

D.A. Pitsoune, *Ανέκδοτα ή Απόκρυφος ιστορία* (Athens, 1971).  
 A. Sidere, *Ανέκδοτα ή Απόκρυφη ιστορία* (Athens, 1988).

### ルーマニア語

H. Mihăescu, *Istoria secretă* (Bucharest, 1973).

### ポーランド語

A. Konarka, *Historia sekretna* (Warszawa 1977).

### ブルガリア語

I. Genov, *Тайната история* (Sofia, 1983).

### スウェーデン語

S. Linnér, *Hemlig historia* (Stockholm, 2000).

### スペイン語

J.S. Codoñer, *Historia secreta* (Madrid, 2000).

### トルコ語

O. Duru, *Bizans'ın Gizli Tarihi* (Istanbul, 2011).

註で利用した史料のうち、邦訳があるもの（複数ある場合は最新のもの）を列挙する。

- ・ アリストパネース (平田松吾訳) 「騎士」『ギリシア喜劇全集』第1巻、岩波書店、2008年
- ・ アリストパネース (佐野好則訳) 「平和」『ギリシア喜劇全集』第2巻、岩波書店、2008年
- ・ スエトニウス (國原吉之助訳) 『ローマ皇帝伝 (上・下)』岩波文庫、1986年
- ・ タキトゥス (國原吉之助訳) 『年代記 (上・下)』筑摩書房、1996年 / ちくま学芸文庫、2012年
- ・ トウキュディデス (藤縄謙三、城江良和訳) 『歴史』全2巻、京都大学学術出版会、2000-2003年
- ・ ヘロドトス (松平千秋訳) 『歴史 (上・中・下)』岩波文庫、1971-1972年、改版2006年
- ・ ポリュビオス (城江良和訳) 『歴史』全4巻、京都大学学術出版会、2004-2013年
- ・ 和田廣訳「ヨハネス・マララス著『年代記』」『史境』27 (1993), 46-59; 32 (1996), 61-72; 36 (1998), 100-114; 40 (2000), 86-102; 43 (2001), 88-103; 45 (2002), 91-109; 49 (2004), 72-89; 52 (2006), 72-81; 54 (2007), 106-119 [第16-18巻の日本語訳].

## I章

[1] 今日まで戦争状態にあるローマ民族に降りかかったすべてのことを記したとき、私はさまざまな活動のすべての説明をふさわしい時期と場所に応じて調整することができた<sup>(1)</sup>。これ以降、もはや私はそれらを今述べた方法によっては執筆しないであろう<sup>(2)</sup>。なぜなら私はここで、まさにローマ人の帝国のあらゆる地で生じたあらゆることを書くからである。[2] その理由は、それらをなした人々がなお生きていた間に、ふさわしい方法で記録することはまったく不可能であったということだ<sup>(3)</sup>。また、大勢の隠密の注意を免れることもできなかつたし、感知された場合、嘆かわしい死をこうむらざることもできなかつたろう。実際、私はもっとも親しい身内すら信用できなかつたのだ。[3] 私は以前の著作で多くのことを述べたが、それらの原因を隠すことを余儀なくされた。それゆえこの著作において私がなすべきは、これまで語られずにいる事柄のみならず、すでに明かされた事柄の原因をも指摘することである<sup>(4)</sup>。

[4] けれどもユスティニアヌスとテオドラの実際の生活について書くという、別の困難な挑戦を始める私にとって、歯をガチガチと鳴らすことも、はるか彼方まで退却することも抑えがたい衝動である。自分が今、後代の人々から信頼に値するともっともらしいとも思われぬようなことを書こうとしているのは重々承知している。一方、長い年月が過ぎて伝聞がより古くなったことで、神話作者の評判を得てしまうのではないかと、悲劇詩人の並びに加えられるのではないかと懸念もなくはない。[5] けれども私はこの著作が証人に事欠かないことを確信するがゆえ、この仕事の重みにひるむことはない。というのも、今日の人々はさまざまな出来事についてもっとも詳しい証人であるうえ、将来はそれらの信憑性の有能な提供者となるであろうから<sup>(5)</sup>。

[6] しかし別のある思慮が、この著作に取り掛かろうとする私を長きにわたって何度も押しとどめた。私は、後に生まれる人々にとって、それを書くことが迷惑になると考えていたのである。というのも、諸事績のとりわけ邪悪なものは、君主たちの耳に入ってその模倣の対象となるよりも、後代に知られずにいるほうが有益かもしれないから。[7] 実際、ほとんどの支配者はその無学から、過去の世代

の悪行をたやすく真似するし、彼らが過去の人々の悪行に目を向けるのはいつの世もごく簡単で、何の労苦もないことである。[8] けれどもその後、私がこうした事績の歴史を書く気になったのは、ちょうどここで書かれる人々がそうであったように、罪を犯す人々がほぼ確実に罰を受けていたということが、将来の君主らの目にひときわ明らかであろうことを考慮したからである。今後、彼らの行いと性格は永久に記録されるであろうし、結果、彼らは不法な振るまいをより躊躇するであろう<sup>(6)</sup>。[9] 実際、当時の物書きが記憶すべき事柄を残していなければ、セミラミスのふしだらな生活やサルダナパロスとネロの狂気を、後代のいったい誰が知ただろう<sup>(7)</sup>。加えて、かりにそうしたことが起きたとして、君主から同じ目に遭わされている人々にとって、私のこの報告はまったく無益というわけではないだろう。[10] なぜなら不運な人々は、危難が自分たちだけに降りかかっているのではないということに励ましを見出すものだから。それゆえ、私はまず、ペリサリオスによってなされた邪悪な行いのすべてを語り、次いで、ユスティニアヌスとテオドラによってなされた邪悪な行いのすべてを明らかにしよう<sup>(8)</sup>。

[11] ペリサリオスには妻がいた<sup>(9)</sup>。彼女について私は先の著述で言及したが<sup>(10)</sup>、彼女の祖父と父親はビザンティオン<sup>(11)</sup>とテッサロニキでその仕事を見せる馭者であり<sup>(12)</sup>、その母親は劇場で卑猥な行いをする女たちの一人であった<sup>(13)</sup>。[12] 彼女は過去にふしだらな生活を送っていて、その性格を駄目にし、父親に仕える呪術師<sup>(14)</sup>らと積極的に交際し、彼女が必要とする様々な教えを受けた<sup>(15)</sup>。その後、ペリサリオスと婚約して彼の妻となったのだが<sup>(16)</sup>、彼女はすでに多くの子供の母親であった<sup>(17)</sup>。[13] つまり、彼女はまさしく最初から姦婦というにふさわしかったのだが、その行いを隠すことにかけては用心深かった。それは、自らの行いを恥じたためでも、ともに暮らす人の怒りを恐れたためでもなかった。実際、彼女はその行いが何であれ、まったく恥に感じるものがなく、数多くの策略によってその夫を制圧していたからである。彼女は皇妃の処罰だけを警戒していた。テオドラは彼女に対して大いに怒り、歯をむき出しにしたからである<sup>(18)</sup>。[14] しかし、緊急事態の際に彼女を助けたことで、彼女はテオド

ラを大人しくすることができた。最初は、私が今後の著作で述べるつもりの方でシルベリオスを失脚させたとき<sup>(19)</sup>、次は、カッパドキアのヨアンニス<sup>(20)</sup>を打倒したときである。これについて私は以前の著作で語っている<sup>(20)</sup>。彼女はこうして不安を抱くことも隠れることもなく、あらゆる誤謬をすすんで自らのものにした。

[15] ベリサリオスの家族の中に、テオドシオスという名のトラキア出身の若者がいた。彼は父祖にしたがい、エウノミオス派と呼ばれる人々の教を奉じていた<sup>(21)</sup>。[16] ちょうどリビアに向けて出航しようとしたとき<sup>(22)</sup>、ベリサリオスは彼を聖なる浴槽で洗い<sup>(23)</sup>、自らの手で彼を持ち上げ、キリスト教徒の養子にする慣わしにしたがって、彼を自分の妻との子と定めた。その後、アントニナはテオドシオスを聖なる言葉による子のように可愛がり、当然のごとく細心の注意を払ったうえで彼を自らのそばに置いた。[17] 航海が始まってすぐに彼女は彼に対して異常な愛欲を抱いて情念の塊となり、神的な事柄と人間的な事柄への一切の畏怖と敬意を振り払い、彼と交わりを持った。初めは人目に触れないようにしていたが、やがては奴隷や召使いのいる前でするようになった。[18] 実際、彼女はすでにその情欲にとらわれ、明らかに愛欲の病にかかっていたため、もはやその行いを阻害するものは何も見なかったのである。ベリサリオスはあるときカルタゴにおいて、行いの最中の彼らに出くわしたが<sup>(24)</sup>、すすんで妻に騙された。[19] というのも、彼は甲板の下の船室にいた二人を発見して激怒したが、彼女はたじろぐこともその行為を恥じることもなかったからである。曰く、「一番高価な戦利品を隠そうと思って、この子と一緒にここに来たの。皇帝に知られたらいけないと思って」<sup>(25)</sup>。[20] 彼女がそのような言い訳をしたところ、彼は納得したと見えて不問に付した。テオドシオスの陰部をおおうズボン<sup>(26)</sup>のベルトが緩んでいたのを見たにもかかわらず。その女への愛情に強いられ、彼は自分の目に映るものが真実と異なることを望んだのであった<sup>(27)</sup>。[21] その色欲がそのまま言い表せない悪事へと進展したとき、他の人々は彼らの行為を傍観して何も語らなかった。だがベリサリオスがシチリアを支配したとき<sup>(28)</sup>、マケドニアという名の奴隷はシラクサにおいて、女主人である彼女に決して引き渡されないようにと、もっとも恐るべき誓約をその主人と交わした

うえで、すべての話を彼に打ち明けた。彼女は証人として、寝室の仕事を担当していた二人の少年を用意した。[22] ベリサリオスはそれらを知ると、彼の従者のある者どもにテオドシオスを始末するよう命じた。[23] 彼はしかし事前に察知してエフェソスに逃れた。というのも彼の従者のほとんどは、その人の不安定な判断に誘発され、夫に対して好意的に振るまうよりもむしろ、妻をすすんで喜ばせることを欲したからである。彼らはテオドシオスに関して彼らに課されていた仕事を放棄したのであった。[24] ベリサリオスがこうした事態に苦悩するのを見たコンスタンティノス<sup>(29)</sup>はその他のことでも同情を覚え、次のように述べた。「私なら若者ではなく妻のほうを抑えるのに」。[25] アントニナはこれを知ると、ひそかに彼への怒りをたぎらせ、猛烈な憎悪をあらわにする機会をうかがった。[26] 実際、彼女はサソリのような女であり、怒りの面では暗黒であった。それからほどなく、彼女は媚薬かおべっかを使うかして、彼女への告発が正当ではないと夫に信じ込ませた。彼は間髪を入れずにコンスタンティノスを召喚し、マケドニアと少年らを妻に引き渡すことを宣告した。[27] 人々の話では、彼女は最初に彼ら全員の舌を切り、次いでその体を切り刻んで袋につめ、何の躊躇もなく海へ放ったという。エウゲニオスという名の召使いがこの蛮行全体の手伝いをしたのだが、シルベリオスへの犯罪をなしたのも彼であった。[28] ベリサリオスはその後、妻に唆されてコンスタンティノスを殺害した。このときにプレシディオスと短剣の事件が発生したのだが、これは私の以前の著作で明らかにされている<sup>(30)</sup>。[29] この人は解放される見込みもあったのだが、私がさきほど言及した発言の償いを彼にさせるまで、アントニナはその怒りを鎮めなかったのである。[30] これ以降、ベリサリオスは皇帝および学識ある全ローマ人からの激しい憎悪的となった。

[31] それらがことのあらましであった。テオドシオスは、フォティオスが排除されないかぎり、ベリサリオスとアントニナがそのとき滞在していたイタリアに来ることはできないと述べた<sup>(31)</sup>。[32] というのもフォティオスはきわめて攻撃的な性格をしていたからである。とくに誰かが別の誰かに対して自分よりも強い力を持つ場合がそうで、テオドシオスの件では彼はまさに窒息するような思いを味わっていた。なぜなら、彼は息子であるにもかかわらず

何の配慮も受けなかったのに対し、その人は大きな権勢を振るい、莫大な金を集めていたからである。[33] 人々が語るころでは、彼一人にそれらの支配権が委ねられたとき、彼はカルタゴとラヴェンナの双方の宮殿から百ケンテナリアの金を掠め取ったという<sup>62</sup>。[34] 一方、アントニナはテオドシオスの決意を知ると、息子を待ち伏せし凄惨な罟をもって彼を追い、その目論見を首尾よく果たすまでは満足しなかった。すなわち彼女は、彼がその不意討ちへの不安から逃れるべく、かの地を去ってビザンティオンへ向かうことと、テオドシオスがイタリアにいる彼女のそばにやって来ることを欲していたのである。[35] 彼女は愛人の滞在と夫の単純さを存分に堪能し、まもなく両者とともにビザンティオンにやって来た<sup>63</sup>。[36] しかしテオドシオスはかの地で良心の呵責を感じ、その心を入れ替えた。完全に悟られずにいることは不可能だと思念したからである。その女はもはや情念を隠すこともそれを秘密裏に解消することもできず、むしろ、明らかに姦婦であることやそう呼ばれることを歓迎している、と彼は見たのである。[37] そのため彼は再びエフェソスにおもむき、慣習にしたがって髪を切り、修道士と呼ばれる人々<sup>64</sup>の並びに自らを加えた。[38] すると彼女はひどく取り乱し、衣服および生活を喪の様式に切り替え、家中をひたすら歩き回っては大声で叫び、どれほどよいものが彼女から失われたか、どれほど彼が忠実で、魅力的で、親切で、精神的であったかと、夫のいる前でも嘆き悲しんだ。[39] しまいには彼女は夫をその嘆きへ引き込んで座らせた。するとその惨めな人も嘆きだし、愛するテオドシオスの名を何度も呼んだ。[40] その後、彼は皇帝のもとを訪れ、その人のみならず皇妃に対しても嘆願し、今も将来も彼の家族に不可欠の存在であるとして、テオドシオスを送り返すように説得した。[41] しかしテオドシオスは修道士の仕事に是が非でも取り組まねばならないとして、そこから出ることを拒んだ。[42] だがその言葉は漆喰のようなものであり、ベリサリオスがビザンティオンから出立した直後、アントニナのもとへひそかに達するのが彼の狙いであった。そして現にそのようになった。

## II章

[1] 実際、ベリサリオスはホスローと戦うべく、

フォティオスとともにすぐに派遣され<sup>65</sup>、アントニナはその自宅にとどまったのだが、これは彼女には前例のないことであった。[2] というのも、その人が独りになってわれに戻ることはないよう、また、彼女のまやかしを無視し彼女についての適切な考えを抱くことがないよう、彼女は大地のどこであろうと彼と一緒に派遣されるよう注意を払っていたからである<sup>66</sup>。[3] テオドシオスによるアントニナへの接近が可能になるよう、彼女はフォティオスをそばから遠ざけることを熱心に試み始めた。[4] 彼女はまずベリサリオスの従者のある者どもに、彼を絶えず悩ませて非難し、一時も与えないようにと説得した。そして毎日のように何かを書いては各々の書を絶え間なく投げ、息子に対してすべてを動かしていた。[5] 若者は彼らによる圧迫を受け、母親に応酬することを決意した。ビザンティオンからやって来たある人が、テオドシオスがひそかにアントニナと楽しんでいると報告すると、彼はその人を直接ベリサリオスのもとへ連れて行き、すべての話を打ち明けるよう命じた。[6] ベリサリオスはその話を聞くと激しく憤り、フォティオスの足もとに口から倒れ、不浄な行いがもっともふさわしくない人々から苦しめられるとして、自分のために復讐することを彼に求めた。「おお、もっとも愛しい息子よ」と彼は言った。「お前の父親がかつてどんな人であったか、お前はまったく知らない。彼はまだ乳飲み子であったお前を置いて、自分の命を終えてしまったから。そればかりか、お前はこの人から何の利益も得ていない。というのも、彼は財産の面でもあまり幸福ではなかったから。[7] だが、義理の父ではあるけれども、私の手で育てられたお前は、ひどい仕打ちを受ける私を守ってしかるべき年頃なのだ。お前はコンスルの地位<sup>67</sup>に就き、莫大な富を築いたけれど、私こそが父と、また母および家族すべてと呼ばれうる者であり、気高き子よ、私は現にそうであろう。[8] 人々は互いへの愛情を血によってではなく、そう、行いによって量ることを習わしとする。[9] 家族の崩壊に加えて、膨大な額の金を奪われた私を、またこうして万人の前で大いなる恥辱を結わえたお前の母を、お前が見やるだけの季節は過ぎたのだ。[10] 女の罪はその夫以上に、子に深く及ぶことをよく考えよ。子は性格の点で自然と母親に似る、という評判がもたらされるのはいわば当然のこと。[11] それゆえ私については、私こそが自分の

妻を大いに愛していることを考慮に加えよ。そしてもし、家族の腐敗者に報復することができなかったならば、私は彼女に何の害も与えないだろう。だがテオドシオスが生き残るならば、彼女への非難を見逃すことは私にはできないだろう」。

[12] フォティオスはそれを聞くと、万事について奉仕すると約束したが、結果的に何か悪しきことに巻き込まれはしないかと懸念した。妻の問題に関するベリサリオスの揺れ動く見解を、彼はまったく信用できなかったからである。また多くの事柄、とくにマケドニアの不幸が、彼を悩ませていたからでもある。[13] それゆえ両者は、死の迫る危険に際しても互いを決して見捨てないようにと、キリスト教徒の間でもっとも恐るべき誓約であるものと、そう呼ばれているもののすべてを互いに誓った。[14] その時点で企てを決行するのは不都合と彼らには思われたため、アントニナがビザンティオンから到着し、テオドシオスがエフェソスへ行くそのときに、フォティオスがエフェソスに入り、テオドシオスと金品とを難なく掌中に収めた。[15] そのとき、彼らは全軍を率いてペルシャの領地に侵入していたのだが、私が以前の著作で明らかにしたように、ビザンティオンでカッパドキアのヨアンニスをめぐる事件が生じた<sup>38</sup>。[16] だが私は恐怖ゆえに、そこでは一つの事実について口をつぐんでいる。すなわち、アントニナはヨアンニスとその娘を故意にだましたのだが、彼女はキリスト教徒の間でそれ以上に恐ろしいものはないと思われるほどの多くの誓約によって、彼らへの不実な意図はまったくないと信じさせたのであった。[17] 彼女はこの企てをなし、皇妃の友情によりたしかな自信を持つと<sup>39</sup>、テオドシオスをエフェソスに送り、自身は何の障害も疑うことなく東方へ向かった。[18] そしてちょうどシサウラノンの要塞を攻略<sup>40</sup>したベリサリオスのもとに、彼女が移動中であるとの報告がある人からもたらされた。すると彼は、他のすべての事柄を無視して軍隊を撤退させた。[19] 実際は私が前に記したように、ある別の問題が軍隊に持ち上がっており、彼はそれによって撤退を余儀なくされた<sup>41</sup>。それは本当に、何よりも早く彼を駆り立てたのであった。[20] 私がこの著作の冒頭で述べたように、当時、なされたことのすべての原因を語ることは、安全ではないと私には思われた<sup>42</sup>。[21] だが結果的には、彼がその家族のささいな問題を国家の最重要の問題

よりも優先したとして、あらゆるローマ人からの非難がベリサリオスに対して巻き起こった。[22] 当初、彼は妻の問題に気を奪われており、妻がビザンティオンから到着すると聞いた瞬間に引き返し、彼女をとらえて処罰を下せるようにと、ローマ人の領地から遠くまで進むことはまったく頭になかった。[23] そのためアレタスの指揮する一軍にティグリス川を渡るように指示したが、彼らは言及に値することは何ものもせず、自陣に戻った<sup>43</sup>。彼自身は、ローマ人の国境から一日の距離を越えて進むことがないように注意していた。[24] 実のところ、シサウラノンの要塞はニシピスの町を経由して行く場合、旅慣れた人でもローマ人の国境から一日以上かかる場所にあるが、別の道を経由すればその距離は半分となる。[25] けれども、もし彼が最初から全軍を率いてティグリス川を渡るつもりであったならば、彼はアッシリアの全土を略奪し、クテシフォンの町まで誰の抵抗に遭うこともなく到達し<sup>44</sup>、アンティオキアの捕虜たちとたまたまかの地にいたすべてのローマ人を救出し<sup>45</sup>、なじみの故郷へ帰還していただろうと私は思う。また彼は、ホスローがコルキスからより安全に自国に帰還したことの最大の要因であった。それがどんなふうにかかったか、私はただちに明らかにしよう。

[26] カバディス<sup>46</sup>の子であるホスローがコルキスの地<sup>47</sup>に侵入し、私が以前に詳しく記した別の事柄をなし、ペトラを占領したとき<sup>48</sup>、メディア<sup>49</sup>軍の大勢の兵士が戦いと険しい地形によって滅ぶという事態が生じた。というのも私が述べたように、ラジキは通行が困難であり、どの地も急峻であるから<sup>50</sup>。[27] そして疫病が彼らを襲い、大半の兵士が亡くなったのだが、彼らの多くは必需品の欠乏によって息絶えたのであった<sup>51</sup>。[28] そのとき、ペルシャの地からそこへ来るのを習わしとしていた人々が、次のように報告した。すなわち、ベリサリオスがニシピスの町の近くの戦いでナベディス<sup>52</sup>に勝利してさらに前進し<sup>53</sup>、シサウラノンの要塞を包囲して攻略し、プリスハミスおよびペルシャ人の800人の騎兵を捕虜とし<sup>54</sup>、サラセン人を率いるアレタスとともにローマ人の別の軍隊を派遣し、その軍はティグリス川を越えて、これまで襲われたことのないその地域全体を略奪した、と。[29] ホスローはその前に、かの地のローマ人が彼らへの対応に追われ、ラジキでの作戦をまったく感知できない

ように、ローマ人に服従するアルメニア人に対して  
 フン人の部隊を送っていた<sup>55</sup>。[30] 別の人々の報  
 告では、その蛮族は遭遇したバレリアノスおよび  
 ローマ人たちと白兵戦を行ったが、彼らに完敗を喫  
 し、大半の兵士が死んだ<sup>56</sup>。[31] ペルシャ人はこ  
 れらを聞くと、ラジキ人との悲慘に打ちのめさ  
 れ、撤退中に断崖や茂みで敵軍に遭遇し、無残に全  
 滅するのではないかと恐怖し、妻子や故郷のことが  
 気がかりになった。そしてメディア人の軍隊の忠実  
 な兵士たちですら、彼が誓約と万人に共通のしきた  
 りを破り、休戦<sup>57</sup>期間中にふさわしい理由もなく  
 ローマ人の領土に侵入し、古く、他のどの国よりも  
 価値がある国に、戦っても勝てる見込みのない国に  
 不正を働いたとして、ホスローを非難し始めた。ま  
 た彼らはより悪しき企てを実行しつつあった。[32]  
 ホスローはこうした事態に狼狽したが、その災いに  
 対するこのような解決法を見出した。すなわち、彼  
 は皇妃がたまたま少し前にザベルガニスに書いてい  
 た書簡を彼らに読んで聞かせたのである。[33] そ  
 の文面にはこうあった。「ザベルガニスよ、私はあ  
 なたが私たちの問題に対して親切であると思いま  
 すし、私がいかに真剣にあなたのことを考えてい  
 るか、あなたもご存じのはずです。少し前に使節と  
 して私たちのもとへお越しになりましたから。[34]  
 そしても、私たちの国家との和平を図るように皇  
 帝ホスローを説得してくださったなら、あなたは、  
 私があなたに対して抱く評価にふさわしいことをな  
 さったのです。[35] 私は本当に、私の夫からあな  
 たに大いなる利益がもたらされることを約束いたし  
 ます。その人は私の意見なしには何も行わないので  
 す」<sup>58</sup>。[36] ホスローはそれらを読むと、女が管理  
 する国というものがあると信じるかと言ってペル  
 シャ人の貴族たちを非難し、彼らの攻撃を抑えるこ  
 とに成功した。[37] それでもなお、彼はそこから  
 多大な恐怖とともに出発し、ベリサリオスの部隊が  
 途中で彼らに立ちはだかることを予想していた。結  
 局、一人の敵に出くわすこともなかったため、彼は  
 喜んでその故国に帰還した<sup>59</sup>。

### Ⅲ章

さてベリサリオスはローマ人の領地に入ると、妻  
 がビザンティオンから到着するのに気づいた<sup>60</sup>。す  
 ると彼は不面目にも彼女を監視し、何度も彼女を殺  
 そうとしたが、私が思うに、燃えるような情愛に屈

して思いとどまった。[2] だが人々が言うには、彼  
 はその妻の策略にはまり、ただちに服従した。一方、  
 フォティオスはエフェソスに急行し、女主人のポン  
 引きであったカリゴノスという名の宦官<sup>61</sup>を鎖につ  
 ないで連行したが、この男は移動中に彼から拷問さ  
 れ、すべての秘密を白状した。[3] テオドシオスは  
 事前に情報を得ると、その地でもっとも神聖で高い  
 称賛を受けていた使徒ヨハネの教会<sup>62</sup>に逃げ込ん  
 だ<sup>63</sup>。[4] しかしエフェソスの長司祭アンドレア  
 ス<sup>64</sup>は賄賂を受け取り、その人の引き渡しに応じた。  
 そのときテオドラは、アントニナに降りかかっていた  
 すべての問題を聞いて彼女のことが気がかりになり、  
 ベリサリオスを彼女とともにビザンティオンに  
 召喚した<sup>65</sup>。[5] フォティオスはそれを聞くと、槍  
 兵および楯兵がたまたま越冬していたキリキアヘテ  
 オドシオスを送った<sup>66</sup>。彼は護衛の人々に対し、そ  
 の人を完全に秘密のまま移送し、キリキアに到着後  
 も、彼がこの地のどこにいるかの情報を一切漏らさ  
 ぬよう、厳重な警戒をもって監視するよう指示し  
 た。そして彼自身はカリゴノスをとめない、またテ  
 オドシオスの莫大な量の財産を持ってビザンティオン  
 に来た。[6] 皇妃はそこで、血なまぐさい恩恵を  
 より大きく汚れた贈り物と交換する術に長けていた  
 ことを、万人の眼前にさらした。[7] アントニナは  
 少し前に彼女の敵の一人、カッパドキアのヨアンニ  
 スを急襲して彼女に引き渡したが、テオドラ自身も  
 多くの無実の人々をこの女に引き渡し、彼らを破滅  
 へ追いやった。[8] というのも彼女は、この二人と  
 親しくしていたことだけを咎め立て、ベリサリオス  
 およびフォティオスと親しかった人々の体を痛めつ  
 け、そうして、彼らの運命がどのように終わったの  
 か、我々がいまだに知らないような処置をしたから  
 である。ほかの者についても、同じことを非難して、  
 追放によって罰した。[9] エフェソスへ行ったフォ  
 ティオスの従者の一人、テオドシオスという名の人  
 について、彼女は彼が元老院議員の位にあったにも  
 かかわらず、その財産を没収し、真つ暗な地下室の  
 中に彼を立たせた。その首は非常に短いひもで飼  
 い葉桶のようなものにつながれたため、彼は体を伸ば  
 して休むことすらできない状態であった。[10] 哀  
 れな人は本当に飼いや桶のそばに立ったまま、食  
 べ、そして眠り、体に必要な他のすべてのことをし  
 た。わめかないことを別にすれば、彼とロバとの違  
 いは何もないような姿であった。[11] 彼はこの状

態で4か月以上を過ごし、うつ病を患い正常な精神を失ったところで牢獄から解放され、ほどなく死んだ。[12] また彼女は、まったく乗り気でなかったベリサリオスを妻のアントニナと無理やり和解させた。他方で彼女はフォティオスを、奴隷のごときさまざまな苦痛を味わわせ、その背中と肩に何度もムチを振るい、テオドシオスとポン引きが地のどこにいるかを口外するよう命じた。[13] しかし彼は、過酷な試練にさらされたにもかかわらず、誓約を厳守すると決意した。彼は病気がちな人で、かつては無頓着な性格であったが、体の治癒に熱心に取り組み、暴力や重労働を経験したことはなかった。[14] つまり彼自身は、ベリサリオスの秘密を何も話さなかったのである。けれども後に、長く保たれていた秘密のすべてが明るみに出た。[15] 彼女はすでにカリゴノスを発見し、もう一人の女に引き渡したうえで、テオドシオスをビザンティオンに呼び出し、その到着と同時に彼を宮殿の中に隠した。そして翌日、アントニナを呼び出し、[16] 「親愛なるパトリキオス<sup>67</sup>夫人よ」と言った。「昨日、誰もかつて見たことのないような真珠が私の手に入りました。もしあなたがお望みなら、出し惜しむことなく、あなたにお見せしましょう」。[17] しかし彼女は事態がよくのみ込めず、ぜひとも真珠を見せてほしいと答えた。すると彼女は宦官たちのある小部屋の中からテオドシオスを連れ出し、彼女に引き合わせた。[18] アントニナは最初ことのほか喜び、感きわまって口もきけないほどであったが、多大な恩恵が自分に施されたことを認めると、彼女のことを救い主にして恩人、そして真の女主人<sup>68</sup>であると言った。[19] 皇妃はそのテオドシオスを宮殿にとどめ、奢侈とその他の享樂にふけらせるとともに、遠からず彼をローマ人の将軍に就けることを約束した。[20] けれども、先を進んだ正義は、赤痢の病によって彼をつかまえ、人の間から消去した<sup>69</sup>。[21] ところでテオドラは、暗く、近所もなく、どこに位置するのもまったくわからない、隠された小部屋を持っていた<sup>70</sup>。そこは昼夜の見分けもつかない場所であった。[22] 彼女はそこにフォティオスを長きにわたって閉じ込め、監視していた。しかしこの人にはそこから一度ならず二度も脱出して自由になるという幸運が生じた。[23] 最初はビザンティオンの人々の間でもっとも神聖とされ、現にそう呼ばれたテオトコス教会の中に避難し<sup>71</sup>、祭壇の上に嘆願

者として座り込んだ。だが彼女はあらゆる暴力をもって彼を起こし、再び投獄した。[24] 次に、彼はソフィアの聖域に来て、突如、キリスト教徒がとりわけ篤く崇めていた洗礼盤そのものの中に座った<sup>72</sup>。[25] だがその女はそこから彼を引っ張り出すことができた。実際、神聖なる場所にいまだかつて彼女が畏怖を覚えたことはなく、いかなる神聖な事物の毀損も、彼女にとっては何の問題にもならなかったようだ<sup>73</sup>。[26] 民衆とともに、キリスト教徒の司祭も恐怖に駆られて脇へ寄り、彼女のあらゆる行為を許容していた。[27] この状態でちょうど三年を彼が過ごしたとき、人々が言うには、預言者ゼカリヤ<sup>74</sup>が誓約とともに彼の夢枕に立ち、逃亡を命じたうえで、この試みにおいて彼を支援すると約束した。[28] この幻視に説得された彼はそこから出発し、誰にも気づかれることなくエルサレムにいたった。無数の人々が彼を捜索しており、実際に出会っていたにもかかわらず、誰にもその若者が見えなかった。[29] 彼は髪を剃るとともに、修道士と呼ばれる人々の衣服を身にまとい、テオドラの追跡をかわすことができた<sup>75</sup>。[30] 一方、ベリサリオスは誓約を反故にし、私が述べたように、不浄の行いに苦しむその人への仇討ちを果たそうとはまったく考えず、当然のことながら、彼のその後のすべての試みに神<sup>76</sup>の敵意が向けられていることに気づいた。というのも、彼はローマ人の領土に三度目の侵入<sup>77</sup>をしたメディア人とホスローに対してただちに派遣されたが、臆病との誹りを受けたからである。[31] たしかに彼はその地から戦いを振り払い、言及に値する仕事をやってのけたように思われた。しかしホスローがユーフラテス川を渡り、人口の多いカリニコスの町を誰の抵抗も受けずに占領し、大勢のローマ人を奴隷にしたとき、ベリサリオスは敵と真摯に対峙することができず、以下のいずれかの理由で自陣にとどまったという評判を招いた。一つは彼が意図的にそうしたというもの、もう一つは彼がひどく恐怖したからというものである。

#### IV章

[1] その頃、次のような別の出来事が彼に降りかかった。私が以前の著作で記したように、疫病がビザンティオンの人々の間に広まったのである<sup>78</sup>。すると皇帝ユスティニアヌスは、死んでしまったと噂されるほどの重篤な状態におちいった。[2] この風

聞は各地に広まり、ローマ人の軍隊にまで達した。指揮官のある者どもはそこで、ローマ人がビザンティオンにおいて彼らに別の皇帝を擁立するならば、彼ら自身は決して許容しない<sup>79)</sup>、と述べていた。[3] けれどもほどなく皇帝が回復したため、ローマ人の軍隊の指揮官たちは互いに中傷し始めた。[4] 將軍のペトロス<sup>80)</sup>と大食漢とあだ名されたヨアンニス<sup>81)</sup>、私がすぐ前に説明した中傷をベリサリオスとブジス<sup>82)</sup>が口にするのを聞いたと強く主張した。[5] 皇妃テオドラは怒りを覚え、彼らが彼女に向けてそれらを語ったと咎めた。[6] そして彼女はすぐさま彼ら全員をビザンティオンに召喚し、その発言に対する調査を行い、個別に相談したいきわめて重要な案件があるとして、突然、ブジスを後宮に呼び出した<sup>83)</sup>。[7] 宮殿の中には、反抗した人々を長期間閉じ込めて監視するための、タルタロスと見まがうほどの迷宮のような堅牢な地下室があった。[8] ブジスはコンスルの家柄の男であったにもかかわらず、その立て坑の中に放り込まれ、時間の感覚もないままそこで過ごした。[9] というのも、彼は暗闇の中に独りで座り、昼夜を区別することもできず、他の誰とも会うことができなかつたからである。[10] 実際は、毎日彼に食料を投げる人がいたのだが、彼は野獣が野獣に、唾者が唾者にそうするように彼に接していた。[11] 彼はすべての人から、すぐに死んでしまったものと思われ、何人もあえて彼を話題にすることも思い出すこともなかつた。2年と4ヵ月の後、彼女は憐れみを催し、その人を解放した。[12] 彼はすべての人から、蘇生した人であるかのごとく見られた。以後、彼はずっと近眼であり、体のほかの部位も病気がちであった<sup>84)</sup>。

[13] ブジスについての出来事はこのように生じた。さて皇帝は、有罪に当たる告発は何もなかつたにもかかわらず、皇妃の圧力を受ける形で、ベリサリオスをその指揮官の任務から外し、彼の代わりにマルティノス<sup>85)</sup>を東方將軍に任じた<sup>86)</sup>。そしてベリサリオスの槍兵および楯兵<sup>87)</sup>を、戦いに優れた側近、指揮官、宮殿の宦官のある者どもに分配するよう指示した。[14] この人たちは彼らに対するくじを投げ、武器とすべてのものを自分たちの間で分配した。結果、各々は何かしらのものを手に入れた。[15] そして彼は、友人と以前彼に仕えていた他の者の多くに対し、以後ベリサリオスのもとへ行くことを禁じた<sup>88)</sup>。[16] するとつらい眺めと信じがた

い情景が生じた。すなわちベリサリオスは、ビザンティオンにおいてほぼ単独の私人となり、つねに憂鬱で悲しげな様子をし、陰謀による死を恐れていた。[17] 皇妃は彼の多くの金が東方にあると知ると、宮殿の宦官のある者どもを派遣してすべてを確保した。[18] ところで私が述べたように、アントニナはその夫にはよそよそしくなっていたが、皇妃とは、彼女が少し前にカッパドキアのヨアンニスを打倒したこともあって、好意的できわめて親密な間柄となっていた<sup>89)</sup>。[19] そのため皇妃はアントニナに謝意を表しようと考え、妻が巧みに道を変えて夫をひどい不運から救ったと見えるように、また、彼女がその悲惨な人と完全に和解するだけでなく、彼女の手で窮地を脱した捕虜であるかのごとく、彼を救ったことになるように、あらゆることを行った。[20] 実際、このようになった。ある朝、ベリサリオスは習慣どおりに若干の哀れな人々とともに宮殿に来た。[21] 彼はそこで皇帝と皇妃の機嫌が好ましくないことに気づくとともに、粗野で身分の低い人たちからの中傷を受けた。夕方遅くに彼は出発して家路についたが、来た道を何度も振り返り、暗殺者が自分に迫るのがわかるようあらゆる場所に目をやった。[22] そしてその恐怖とともに部屋に上がり、独りでベッドの上に座り、何の気高いことも考えず、自分が男であったことも思い出せず、汗をだらだらと流してめまいを感じ、体を激しく震わせ、奴隷のような恐怖と男らしさの欠片もない臆病な心配とで消耗しきっていた。[23] アントニナのほうは、事態がまったくのみ込めず、何が起こるか予想もつかないといった様子で、長い間そこら中を歩き回り、胸やけを静める振りをしていた。現に、彼らはまだ互いへの疑いを抱いていたのである。[24] その間、クアドラトスという名の人がすでに日が沈んだ時刻にやって来て、邸宅を通り抜けていきなり男部屋の扉の前に立ち、皇妃からそこに遣わされたことを告げた。[25] ベリサリオスはそれを聞くと、両腕と両足をベッドに引き上げ、目前に迫った破滅にそなえて仰向けに横たわった。このように男らしさは彼を完全に見放してしまっていた。[26] だがクアドラトスは彼のそばには来ずに、皇妃からの書簡を彼に示した。そこにはこう記されていた。[27] 「高貴なるお方、あなたが私たちに何をしたか、あなたはご存じです。けれども、私はあなたの奥方に多大な恩義を感じているので、あなた

に対するすべての告発を見逃すことに決め、あなたの魂を彼女に贈ります。[28] これより先、あなたは安全と金銭とに信を置くことができます。あなたが彼女に対してどう振るまわれるか、私たちは今後の行いにより知るでしょう。[29] ベリサリオスはこれらを読むと、躍り上がって喜ぶとともに今ある気持ちを示そうと欲して、妻のすぐそばに立ち、その足元に口から倒れ込んだ。[30] それから両手で彼女のふくらはぎの辺りをつかみ、舌で妻の足の裏を舐め回し、彼女のことをその生命と安全の源と呼び、今後は彼女の夫ではなく、忠実な僕になると約束した。[31] 一方、皇妃は30ケンテナリアの金を皇帝に与え<sup>90</sup>、残りをベリサリオスに返した。

[32] 将軍ベリサリオスについての出来事はこのように起こったのだが、その少し前に、幸運がゲリメル<sup>91</sup>とウィティギス<sup>92</sup>を捕虜として彼に引き渡していた。[33] この人の富は以前からユスティニアヌスとテオドラをひりひりと刺激しており、それは皇帝の宮廷にふさわしいほどの量であった。[34] 彼らは、ゲリメルおよびウィティギスの公的財産の大半を彼がこっそり隠し、皇帝にはまったく取るに足りないごく一部しか渡さなかったと主張していた。[35] 彼らはこの人の労苦と外部からの中傷を考量しつつ、彼に対する十分な口実を何も見いだせなかったので、沈黙を保っていた。[36] そのとき皇妃は、怯えて完全に縮み上がっていた彼をつかまえ、一つの方策によってその全財産の主人となることに成功した。[37] というのも、双方はすぐに姻戚関係を結び、ベリサリオスの娘で彼の唯一の実子であったヨアンニナが、皇妃の娘の子のアナスタシオスに嫁いだからである<sup>93</sup>。[38] するとベリサリオスは彼のもとの指揮官職に就くこと、すなわち東方将軍に任じられ、ホスローとメディア人に対して再度ローマ人の軍隊を指揮することを求めたが、アントニナはこれを決して認めなかった。というのも、その土地で彼女は彼からひどい侮辱を受け、そこは二度と目にされるべきではないと彼女が言ったからである。

[39] その結果、ベリサリオスは帝国騎馬隊の指揮官<sup>94</sup>に任命され、再度イタリアに派遣されたのだが、人々の話では、彼は皇帝に対し、この戦いにおいて一切の金を皇帝に求めないこと、そして彼自身が、自分の金によって戦いを準備万端に整えることを約束したという<sup>95</sup>。[40] すべての人は次のよう

に思っていた。すなわち、ベリサリオスが、私があるましを述べたその妻についての問題を支配し、戦争について私が記した約束を皇帝とかわし、ビザンティオンでの滞在を切り上げ、町の城壁の外に出るやいなや再び武器を手に取り、妻と圧迫した人々に対して、何か気高く男らしいことを思慮するのではないかと<sup>96</sup>。[41] しかし彼自身は起こったことをまったく考慮に入れず、フォティオスや他の親しい人々との間になした誓約を完全に忘れて無視し、その妻にしたがった。彼女は当時60歳を過ぎていたにもかかわらず、彼は彼女への異常な愛情にとらわれていた<sup>97</sup>。[42] けれども彼がイタリアにいる間、毎日、彼にとって悪しき問題が起こった。明らかに、神の敵意が彼に向けられていた<sup>98</sup>。[43] 当初の状況でその将軍がテオダハドとウィティギスに対して仕組んだ作戦は、状況にかなっているとは思われなかったけれども、おおよそ有利な結果をもたらした<sup>99</sup>。しかし、彼が、この戦争にかかわる諸問題に習熟していたがためによりよい作戦を立てたという評判を得た後、事態が不運な結末を迎えると、彼の無計画が主たる原因であるとみなされた。[44] こうして人間の物事を支配するのは、人間の計画ではなく、神の決定であり、人間はそのことを運命(テューケー)と呼びならわす。出来事なるものが、彼らの目に明らかとなるように進行する理由は、人間には見えないからである。[45] 実際、運命の名は不合理と思われるものに付けられることを好む。しかし、それらのことは各々に好ましいように、そんなふうを考えさせよう<sup>100</sup>。

## V章

さて再びイタリアに来ていたベリサリオスはもっとも恥ずべき仕方でそこから脱出した。というのも私が以前の著作で述べたように<sup>101</sup>、彼は要塞がある場所を別として、5年もの間一度も上陸することができなかったからである。彼はその期間ひたすら航海を続け、沿岸をうろろろしていた。[2] 苛立ったトティラは城壁の外で彼をつかまえようとしたが<sup>102</sup>、彼を見出すことができなかった。彼自身とローマ人の軍隊全体は激しい恐怖に駆られていたからである。[3] そのため、彼は失われた領土を取り戻さなかったばかりか、ローマといわば他のすべての領土を喪失した<sup>103</sup>。[4] とくにその間、彼は皇帝から何も供与されなかったことから金銭欲を募らせ、恥

ずべき利益の厳正きわまる管理人となり、それまでの生活に対する租税の取り立てと称して、ラヴェンナとシチリア、そして彼が到達することのできた他の土地に暮らしていたイタリア人、いや、ほぼすべての人を手当たり次第に略奪した。[5] こうして彼はイロディアノスをも追跡して金を求め、この人にあらゆる圧力をかけた。[6] 悲嘆に暮れたその人はローマ人の軍隊から離脱し、すぐにわが身を従者およびスポレトの町ともども、トティラとゴート人たちに引き渡した<sup>(100)</sup>。[7] さて、ローマ人の諸問題をひどくかき乱した事件、すなわち、彼とビタリアノス<sup>(101)</sup>の甥であるヨアンニス<sup>(102)</sup>の対立がいかにして生じたかを、私はすぐに明らかにしよう。

[8] 皇妃はゲルマノスへの憎しみを募らせ、その敵意をすべての人に露骨にさらしたので、皇帝の従兄弟であったにもかかわらず、彼とあえて縁組しようとする者はいなかった<sup>(103)</sup>。彼の息子たちは、彼女の生が果てるまで結婚せずに過ごした。彼の娘ユスティナ<sup>(104)</sup>は18歳になっていたが、なお未婚であった。[9] そのためヨアンニスがベリサリオスのもとから送られビザンティオンにやって来ると<sup>(105)</sup>、ゲルマノスは縁組について彼と交渉することを余儀なくされた。その人の位は彼自身の位とは大きな隔たりがあったのである。[10] この話は両者にとって満足の行くものだったので、彼らは真にあらゆる力でその縁組を成就させようと、もっとも恐るべき誓約によって相互を拘束することにした。両者のいずれも、相手への信用をほとんど持っていなかったのである。一方は今よりも上の位に手が届くことを理解し、他方は義理の息子を必要としていた。[11] しかし彼女はわれを忘れ、彼らの縁組を妨害するため、あらゆる手段を用い、あらゆる陰謀によって各々に断念させることが必要であると考えた。[12] 強い警告を発したにもかかわらず、両者を説得できなかったため、彼女はヨアンニスを殺害するという明白な脅しをかけた。[13] この後、ヨアンニスは再度イタリアに送られたが、アントニナの陰謀を恐れ、アントニナがビザンティオンに来るまで、決してベリサリオスに合流しようとしなかった<sup>(106)</sup>。[14] というのも、皇妃が彼の殺害を彼女に命じると判断される状況だったからである。また、アントニナの性格を推量し、ベリサリオスがすべてを妻に委ねていることをよく知っていた彼に、大いなる恐怖が生じ、その内に入り込んだからである。[15] それ

は、以前は片足で立っていたローマ人の諸利益を地面に倒したのだった<sup>(107)</sup>。

[16] つまりゴート戦争はベリサリオスにはこのように生じた。意気阻喪した彼は、かの地から一刻も早く離れて自由になれるよう皇帝に求めた。[17] 皇帝が彼の求めに応じたことを知ると、彼は歓喜してただちに出発し、ローマ人の軍隊とイタリア人の上機嫌で別れを告げた。だが彼は、大部分の領土を敵の掌中に残したままだった。壮絶な包囲戦にさらされたペルージャは、彼の移動中に完全に攻略され、私が先に記したとおり<sup>(108)</sup>、あらゆる悪を目の当たりにした。そして幸運とは真逆のことが、次のように彼の家族に降りかかった。

[18] 皇妃テオドラはベリサリオスの娘と彼女の孫を急いで結婚させようと図り、ひんぱんに書簡を送って娘の両親を悩ませた<sup>(109)</sup>。[19] しかし彼らは縁組を手控え、結婚式を彼ら自身が出席できる日まで延期した。彼らは皇妃からビザンティオンへの出頭を命じられると、当面イタリアから離れることができないふう装った。[20] 彼女はその孫をベリサリオスの財産の主にすることを切望していたが、それは、ベリサリオスには他の子がおらず、娘が相続人になるのがわかっていたからである。けれども彼女はアントニナの考えをまったく信用することができず、もっとも差し迫った状況で多大な恩義にあずかったにもかかわらず、彼女が死後に自分の家族に対して忠実でなくなることを危惧し、取り決めに反故にして不浄なる行いに及んだ。[21] すなわち、彼女は青年と少女とを法に反して同居させたのである<sup>(110)</sup>。人が言うには、彼女はまったく乗り気でなかった少女にひそかに交わりを持つことを強制し、そうして処女でなくなった少女との結婚式をとり行い、皇帝にその企てを妨害させなかった。[22] だが実は、この行いは、アナスタシオスと少女が互いに抱いた燃えるような情愛によってなされたのであり、彼らがこうした状態にある中、8か月以上の時間が過ぎた。[23] 皇妃の死後<sup>(111)</sup>、アントニナはビザンティオンに来ると、その人が彼女のために最近行ってくれたことを意図的に忘却し、少女がもし彼女によって別のの人に嫁がされるなら、かつて淫行に走った女と思われてしまうことをほとんど考慮しなかった。そしてテオドラの子孫の縁組を軽視し、まったくその意に反する形で、娘を愛する夫から無理やり引き離した。[24] この行いのゆえに、恥知らずと

の大いなる汚名が万人によって惹起されたが、彼女は到着した夫を難なく説得し、自分の罪責を彼に共有させた。結果として、このとき男の性格が白日のもとにさらされた。[25] かつてフォティオスや親しい人々との間になした誓約をまったく履行しなかったにもかかわらず<sup>(116)</sup>、彼は万人からの赦しを得ていた。[26] その男の不実の理由は妻による支配ではなく、皇妃への恐怖であると、人は疑っていたからである。[27] 私が述べたように、テオドラが没したとき、フォティオスに対しても、彼と親密であった他の誰に対しても配慮は示されていなかったが、妻が彼の女主人として立ち現われ、ポン引きのカリゴノスはその主人であった。そのとき、彼に失望したすべての人は侮蔑しながら悪評を世に広め、負け犬の愚劣さを嘲った。こうしてベリサリオスの罪は、このように包み隠さず語ることができるのである。

[28] バッホスの子セルギオス<sup>(117)</sup>によるリビアでの罪について、私はふさわしい著作において十分に明らかにしているが、彼はまさにかの地でのローマ人の諸利益が壊滅する最大の原因であった。彼は福音書にもとづいてレウアテ人との間になした誓約を無視し、理不尽にも 80 人の外交使節を殺害したのだが<sup>(118)</sup>、今、次のような話が私の著作に付加されるのが必要であろう。すなわち、これらの人々は邪念を抱いてセルギオスのもに來たわけではなく、セルギオスのほうも彼らに対する疑惑の口実を何も持たなかったのだが、彼は誓約を果たすといつて彼らを食事に呼び出したうえで、無秩序に殺したのだった<sup>(119)</sup>。[29] この行いのゆえに、ソロモンとローマ人の軍隊、そしてすべてのリビア人に破滅が生じた。[30] というのも彼のせいで、またとくに私が述べたようにソロモンが死没したことで、司令官の誰も、兵士の誰も、危険な戦争におもむく価値を見出さなくなったからである<sup>(120)</sup>。[31] 中でもシシニオロスの子ヨアンニス<sup>(121)</sup>は彼への憎しみのゆえに、アレオビンドス<sup>(122)</sup>がリビアに到來するまで、戦闘から離れていた<sup>(123)</sup>。[32] 実のところ、セルギオスは柔弱かつ戦いに不向きで、気質と年齢の点でははなはだ若く、すべての人への過剰な嫉妬と高慢にとらわれ、ひどい生き方をさらしつつその頬を膨らませていた。[33] しかしたまたま彼がベリサリオスの妻アントニナの娘<sup>(124)</sup>の婚約者になると、皇妃はリビアがひたすら崩壊するさまを見ていたにもかかわらず

ず、彼に処罰を下すことも、その司令官の職を解くことも決して望まなかった。そして彼女と皇帝は、セルギオスの兄弟であるソロモン<sup>(125)</sup>がピガシオス<sup>(126)</sup>を殺したことも不問に付した。それが何であるかを私はすぐに明らかにしよう。

[34] ピガシオスがソロモンをレウアテ人のもとから身請けし、蛮族が自分たちの国へ帰ったとき<sup>(127)</sup>、ソロモンは彼を身請けしてくれたピガシオスと若干の兵士をともないカルタゴへ向かったが、その道中にピガシオスはソロモンが何らかの不正をなしているのに気づき、神が少し前に彼を敵の中から救出してくれたことを忘れてはならないと彼に言った。[35] すると彼は、自分が捕虜であったことを非難されたと感じて激昂し、ピガシオスをその場で殺し、この人への恩を仇で返したのであった。[36] ソロモンがビザンティオンにやってくると、皇帝は、彼がローマ人の国家への裏切り者を始末したとして、殺人の罪から彼を免れさせた。[37] この人は彼に書簡を与えて、その行為への免責を保証した。こうしてソロモンは処罰から身をかまし、その故郷と家族の人々にまみえるべく喜んで東方へ向かった。[38] けれども神の罰がその旅の途中で彼をつかまえ、人の間から消去した。ソロモンとピガシオスにまつわる事件はこのように生じたのであった。

## VI章

さてユスティニアヌスとテオドラがいかなる性格の人で、彼らがローマ人の諸利益をいかなる方法で壊したかを私は語ることにしよう。[2] レオ<sup>(128)</sup>がビザンティオンにおいて皇帝の権力を保持していたとき、イリリア族の 3 人の若い農夫、ジマルホス、ディティピストス、そしてベデリアナ<sup>(129)</sup>のユスティヌス<sup>(130)</sup>が軍隊に加わった。彼らは家庭で貧困による問題とつねに格闘しなければならず、それから逃れようとしたのである。[3] そして彼らは徒歩で旅し、山羊の毛の外套を肩に羽織ってビザンティオンにやってくたが、彼らは家では焼いたパンのほかには何も外套に入れず、到着したのであった。皇帝は彼らを兵士の身分に登録し、近衛兵に配属した<sup>(131)</sup>。というのも、彼らはみな非常に立派な体をしていただけである。[4] だが後に、帝位を継承したアナスタシウス<sup>(132)</sup>と、彼に対して武装蜂起したイサウリア族との間に戦いが起こった<sup>(133)</sup>。[5] 彼は彼らに対し、

せむし男とあだ名されたヨアンニス<sup>(134)</sup>の指揮する、特筆すべき部隊を送った。このヨアンニスは、何らかの罪があったとしてユスティヌスを牢獄に監禁したが<sup>(135)</sup>、もしその間にとある夢の幻視<sup>(136)</sup>が生じて彼を妨げていなければ、あくる日、彼を人の間から消去するところだった。[6] というのもその将軍が言うには、異様な体の大きさをした、他の点でも人とは似ても似つかぬ強力な何か、彼の夢の中に現れたからである。[7] そしてそれは、たまたまその日に投獄された人の解放を彼に命じた。だが眠りから飛び起きた彼は、夢の幻視のことは気に留めなかった。[8] けれども次の夜が来ると、彼は夢の中で、先に聞いた言葉を再び聞いたような気がしたが、彼は命じられたことを実行しようとは思わなかった<sup>(137)</sup>。[9] そして三度、夢の幻視が彼に訪れ、彼がその命令を実行しなければ絶望的な定めが待つと彼を脅したうえで、その後彼が憤慨することがあれば、この人とその家族が必要になるだろうと付け加えた<sup>(138)</sup>。

[10] 当時、ユスティヌスはこうして生き延びたのであったが、時がたつと、このユスティヌスは大いなる権力を手にした。[11] 皇帝アナスタシウスが彼を近衛兵の長官に任命したからである<sup>(139)</sup>。そして皇帝が人の間から消去されると、その職権によって彼自身が帝位を継いだ<sup>(140)</sup>。彼はすでに墓に入りかけの老人であったが<sup>(141)</sup>、一つの文字すら知らず、よく言われていたように、無アルファベットの人であった。これは少なくともローマ人の間ではかつてなかったことである。[12] 皇帝は彼から発行されるあらゆる文書に、自分の文字を書き込むのが習わしであったが、彼自身は文書を発行することも、その内容をきちんと理解することもできなかった。[13] しかし、たまたま側近として彼に仕え、いわゆるキエストルの官職を有するプロクロス<sup>(142)</sup>という名の人が、彼独自の判断ですべてをとり行っていた。[14] だが皇帝の手の証拠をともなわせようと、その務めをになった人々<sup>(143)</sup>は次のことを考案した。[15] すなわち、彼らは用意された木片に、ラテン語で読んだこと<sup>(144)</sup>を意味する4つの文字の型を彫り込み、皇帝たちが書くときによく用いるインクに筆を浸し、それをこの皇帝の手に持たせたのである。[16] そして彼らは、私が述べた木片を文書の上に置き、皇帝の手を握り、筆とともに4文字の型にそって動かし、木片のすべての彫り込みをなぞらせ

た。彼らはこのようにこなすことで、皇帝の文字なるものを記していたのである<sup>(145)</sup>。

[17] ローマ人にとってのユスティヌスの問題はこんなふうであった。彼はルピキナという名の妻と一緒に暮らしていた<sup>(146)</sup>。彼女は奴隷かつ蛮族であったので、以前は彼女を買った人の妾であった。そして彼女はユスティヌスとともに、人生の終盤に帝権を手にした。

[18] さてユスティヌスはその家臣に悪も善も及ぼさないことができた。というのも、彼は素朴きわまる性格の持ち主であり、極端に口下手で、非常にがさつでもあったから。[19] 一方、彼の甥のユスティニアヌス<sup>(147)</sup>はまだ若かったけれども、すべての支配をとり仕切っており、全時代にわたって誰もかつて聞いたことがないようなすさまじい災いすべての原因となった。[20] 実際、彼は不当な殺人や他人の金の強奪をまったく意に介さなかったし、彼から何の理由も示されないまま、何千もの人が人の間から消されることも彼にとっては何でもなかった。[21] そして彼は、確立されたものを保つのは無価値であると考え、つねに、すべてを新しくしようと望んでおり、まとめて言うならば、彼は立派に確立されたものの最大破壊者であった。[22] ところで、それは全地に降りかかったのだが、私が以前の著作で述べた疫病が生じたとき、亡くなった人以上に、生き延びた人がいた。彼らはまったく罹病しなかったか、あいにく罹病したとしても回復したのである。[23] しかし、ローマ人は何人たりともその人から逃れられず、天から民族全体に降りかかる他のすべての苦難のように、何人も無傷でいることを許されなかった。[24] 実際、彼は人々を何の理性もなく殺していた。ある人々は貧困と格闘する、死んだ人よりも悲惨な状態に置かれたため、彼らの現状をもっとも惨めな死によって解消してほしいと懇願した。一方、彼はある人々の財産と生命の両方を奪っていた<sup>(148)</sup>。[25] ローマ人の国家だけを壊すのは彼には何の造作もなかったのも、彼は、それらの国の住人をついて彼の支配下にあった人々とあわせて破壊できるというただそれだけの理由で、リビアとイタリアを征服した。[26] 実に彼は支配を始めて10日足らずで、宮殿の宦官たちの長であったアマンティオス<sup>(149)</sup>を他の人々とあわせて殺したが、その理由は、その人が町の長司祭であるヨアンニス<sup>(150)</sup>に軽はずみな発言をした、という彼の咎めだけで

あった。[27] その結果、彼は万人の中でもっとも恐怖される人となった。そして彼はただちに暴君のビタリアノスを召喚したのだが、かつてキリスト教の秘跡にともにあずかった際、彼はその人に安全の誓いを与えていた。[28] 少し後に、彼は自分に齒向かったこの人を疑い、宮殿においてその友人ともども何の理知もなく殺害し、結果的に、もっとも恐るべき誓いを完全に踏みにじったのである<sup>(55)</sup>。

## Ⅶ章

さて古くから民衆は、私が先の著作で述べたように、二つの党派に分かれていたが、彼自身はかつてその熱烈な支持者であった青組と交流し<sup>(56)</sup>、すべてをかき回し混乱に投じること成功した。その結果、彼はローマ人の国家の膝を地につかせた。[2] しかし青組の全員がこの人の意向にしたがうと決めたわけではなく、たまたま過激派<sup>(57)</sup>であった人々だけがそうした。[3] そして恐怖がいつそう進むにつれ、彼ら自身ですら万人の中でもっとも穩健であるように思われた。[4] というのも、彼らはその権限よりも控えめに罪を犯したからである<sup>(58)</sup>。実のところ、緑組の過激派たちも静かにはしておらず、彼らの力の及ぶ範囲で罪をなしていたのだが、つねに彼らだけが処罰されていた。[5] そのことはつねに、彼らにより大なる励ましを与えていた。不当な仕打ちを受ける人々はやけっぱちになるのがつねだからである。[6] そのとき彼は青組をあおって憤激させたため、ローマ人の国家全体はまるで地震か洪水が降りかかったかのように、あるいはあらゆる町が敵によって占領されたかのように、激しく揺さぶられた。[7] 実際、すべてのものがすべての点でかき乱され、以後、何も原型をとどめていなかったが、さらなる混乱が生じたことで、法律と国家秩序は完全にひっくり返った<sup>(59)</sup>。

[8] まず、髪を整え方が過激派によってある新たな方式に変更された。彼らは他のローマ人と同じようには髪を切らなかつたからである。[9] 彼らは口ひげにもあごひげにも決して触れず、ペルシャ人のようにつねにそれらを長く伸ばす<sup>(60)</sup>ことを望んだ。[10] しかし彼らは頭の前の髪をこめかみまで切り、マッサゲタイ人<sup>(61)</sup>のように、後ろの髪は何の理由もなく長く伸びるにまかせていた。そのため彼らはこれをフン様式と呼んでいた。

[11] 次に服装については、彼らはみな立派な身

なりをすべきであると考え、彼らの個々の位よりも派手な衣服を身にまとっていた。[12] 彼らは所有物でないものから、それらを入手することができたからである。そして彼らはチュニックの腕をおおう部分を手首に非常にきつく結わえ、手首から肩までの部分を信じがたいほど広く余らせた。[13] 彼らが劇場やヒッポドロームで叫んだり、慣習どおりに応援したりする際に腕を振るたびに、彼らの衣服のこの部分が実に高くたなびいた。すると愚かな人々は、彼らの体はそうした衣服によっておおわねばならないほど立派で頑丈なのだろうと理解し、そのゆったりとしたまさに空っぽの衣服によって、むしろその体の貧弱さがさらされているとは考えなかった。[14] 彼らの肩掛けとズボン、そして靴の大半も、名称および性質の点でフン人的なものに区分された。

[15] ところで当初、彼らのほぼ全員が夜間に堂々と武器を携帯<sup>(62)</sup>していたが、昼間は両刃の短刀をマントの下の太ももの辺りに隠し、日が暗くなるとつねに徒党を組み、広場のいたるところや狭い路地で上流の人々を襲い、衣服、ベルト、金のブローチを、そして手に持っているものがあればそのすべてを被害者から奪った。[16] 彼らは強奪に加えて一部の人を殺害すべきと考えていたが、それはその人々に起こったことを誰にも語らせないためであった。[17] まさにあらゆる人、とりわけ青組の中の過激派ではない人々が彼らに悩まされていたが、それは彼ら自身、無感覚ではいられなかったからである。[18] 結果的に以後、ほとんどの人は銅のベルトとブローチと、その位よりはるかに見劣りのする衣服を身に着けるようになったが、これは美の愛好ゆえに殺されないようにするためであった。また彼らは日がまだ沈まないうちから自宅に引きこもり、身を隠すようになった。[19] だが悪が継続し、民衆の既存の権威<sup>(63)</sup>による犯罪者への対処が何も生じなかつたため、この者どもの大胆さは増すばかりであった。[20] 実に、自由を許容された罪は際限なく進行するが、処罰される犯罪ですら容易には撲滅されない。[21] なぜなら、ほとんどの人は本性的に罪を犯しやすいからである。

[22] 青組についての事柄はこのようにもたらされていた。反対の過激派のある者は、何の処罰も受けずに一緒に犯罪が起これるという欲から、彼らの党派に鞍替えし、ある者は逃亡を選んで別の土地に

潜伏していた。だが多くの者はその場で捕えられ、その敵に殺害されるか権威から処罰されるかした<sup>(60)</sup>。[23] そして他の多くの若者もこの組織に流れ込んだ。彼らはかつてそれらに何の関心も持たなかったのだが、権力および暴力への欲によってそこへ導かれたのである。[24] 現に、人々から名を与えられた罪のうち、この時代に犯されず報いも受けずにいたものは一つもない。[25] すなわち当初、彼らはその敵対する過激派を滅ぼしていたが、やがては彼らに歯向かわなかった人々をも殺し始めた。[26] 多くの人は金で彼らを懐柔し、自らの敵を指し示した。すると彼らは緑組の名を彼らに押しつけ、即座にその殺害に及んだ。この人たちのことを彼らはまったく知らなかったのだが。[27] これらのことはもはや暗がりや片隅ではなく、昼間のすべての時間に、町のいたるところで起きており、おそらく有力者の目の前でも事件が起きていたであろう。[28] というのも、処罰への恐怖が彼らに差し迫ることはなく、彼らはその犯罪を隠す必要を何も感じなかったからである。一方、名誉への欲求のようなものが芽生え、彼らは周りで倒れた丸腰の人を一撃で殺しては、力強さと男らしさを誇示した。危険な暮らしの中で生き長らえようとする希望は誰にも残っていなかった。[29] すべての人が深い恐怖によって、死が自分たちに迫っていると感じていたからであり、いかなる場所も安全とは思われず、いかなる時間も確実な安全を誰かに与えるとは思われなかった。人々はもっとも誉れある聖域においても、また公的な集いにおいても理不尽に殺害されていたからであり、友人や親族からの信用はまったく残っていなかった。多くの人は、もっとも親しい人々の陰謀にかかって死んでいたからである。

[30] けれども、これらの行いへの調査は何もなかった。予期せぬ不幸があらゆる人に降りかかり、誰も倒れた人々の仇を取らなかった。[31] 何らかの法ないし契約の力のようなものは安定的秩序の中にはもはや残っていなかったが、すべてはいや増す暴力に向けられ混乱に投げられた。その国制は僭主制と酷似していたが、それは既存の僭主制ではなく、日ごとに変化し絶えず始まるそれであった。[32] 支配者たちの見解は、一人の男への恐怖ゆえに思考の面で奴隷化してしまった人々の麻痺したそれに似ており、係争中の問題を裁く人々は、彼らにとって正当かつ合法と思われる形ではなく、係争者

の各々にとって過激派が敵対的か友好的かによりつつ、判決の小石を与えていた。というのも、彼らの事前の指示を無視した裁判官には、死の罰が迫ったからである。

[33] また多くの金貸しは多大な暴力のもとに、貸した金を一切受け取ることなく、契約書を債務者たちに返し、また大勢の人は完全に意に反する形で、その家内奴隷を自由にした。[34] また人々が言うには、ある女たちはその意に反する多くの行為を、彼女らの奴隷によって強いられた。[35] また著名な人々の子らはすでにその若者たちと交際し、まったく意にそわない他の多くのことをなすよう、とりわけ彼らに金を渡すよう父親に強制していた。[36] また多くの子らが不本意ながら過激派との不浄な同衾をなすことを強いられ、父親たちもそれをよく分かっていた。[37] そして夫と暮らす妻たちにも同じ苦しみが生じた。話によれば、一人の非常によい身なりをした婦人がとある町の近くで、夫とともに反対側の陸地<sup>(61)</sup>のとある郊外へ船で渡ろうとした際、その航海の途中たまたま過激派が彼らに出くわした。彼らは脅しによって婦人を夫から引き離し、彼女を自分たちの船に乗せた。彼女は若者たちと船に乗り込むと、勇気を持つようと、そして彼女の身をちっとも案じないようにと、ひそかに夫に合図を送った。[38] その体への辱めを受けることは決してないから、と彼女は伝えたのである。けれども夫がなお深い悲しみとともに彼女を見ていたとき、その体は海に沈み、またたく間に人の間から消されてしまった。

[39] それらが当時、ビザンティオンでこの過激派からなされていたことである。だがそれらは、ユスティニアヌスから国家に対して犯された罪ほどには、その被害者を苦しめなかった。というのも、悪人どもから過酷な仕打ちを受けた人々にとって、無秩序にともなう苦痛の大半は、法および政府による処罰への絶えざる期待によって取り除かれるからである。[40] 実際、未来への好ましい希望を抱くことで、人々は彼らの現実により軽く、よりたやすく耐えるのだが、国家の既存の政府から虐待を受ける人々は、その事態にいっそう激しく苦しみ、処罰が期待できないとして、絶えず絶望におちいるかもしれない。[41] だが彼は、悪に苦しむ人々を助けるつもりが毛頭なかったがゆえに、さらには、過激派の公然たる守護者であることを決してやめるつもり

がなかったがゆえに、罪を犯していた。[42] 現に彼は莫大な金をその若者たちに与えており、彼らのある者には長官職や他の位を授けるべきと考えていたのである。

## Ⅷ章

そしてそれらのことはビザンティオンとあらゆる町でなされていた。というのも、他のあらゆる疾病と同様に、悪がそこから始まり、ローマ人の国家のあらゆる地に降りかかったからである。[2] けれども知覚のようなものがその人には備わっていなかったため、悪事が皇帝<sup>(162)</sup>の注意を引くことはまったくなかった。彼はヒッポドロームでの催しをいつも直に見ていたというのに。[3] 実際、彼は極端に愚鈍であり、耳を始終揺らしながらくつわを引く人にしたがう愚かなロバにそっくりであった。[4] ユスティニアヌスはそれらをなしつつ、他のすべてを混乱に投じていた。彼は叔父の支配を受け継ぐやいなや<sup>(163)</sup>、まるでそれらの主となったかのように、公金を無節操に浪費することに熱中し始めた。[5] 彼はフン人のいつも会う連中に、国家のための大金を与えていた。その結果、ローマ人の土地は度重なる侵略にさらされた。[6] この蛮族は一度ローマ人の富の味をしめると、そこへ通じる道から二度と離れられなくなったからである<sup>(164)</sup>。

[7] 彼はまた、絶えず押し寄せる波を食い止めるために、海沿いのとある建造物に大金を投じるべきと考えていた。[8] 彼は石を積み重ねて岸辺から前進し、海の流れに打ち勝とうとしていたが、あたかも富の権能をもって海の力に張り合うかのようにであった<sup>(165)</sup>。[9] そして彼はすべてのローマ人の私有財産をすべての土地から彼のもとに集め、ある人には犯されてもいないすべての罪をかぶせ、ある人には彼に贈り物をしたのだと信じ込ませた<sup>(166)</sup>。[10] だが多くの人は殺人や他の重罪の廉で捕えられると、全財産を彼に譲り、彼らが犯した罪への処罰から逃れていた。[11] 一方、たまたま自分のものではない近隣の土地への権利を主張するも、法が彼らの障壁となって係争相手への勝利をまったく見込めなかった別の人々は、係争中のその土地を彼に贈って決着をつけていた。彼ら自身は損失のない寄贈を通じてその男と親しくなる利を得、もっとも不法な手段によって係争相手への勝利を収めることができた。

[12] 私は思うに、ここでその人<sup>(167)</sup>の姿を記述することがふさわしい。彼の体は高くもなければとくに低くもなく、平均的であり、痩せてはおらず、わずかに肥えており、顔は丸いが、醜いわけではなかった。実に彼は二日食を絶っても、火照った顔をしていた<sup>(168)</sup>。[13] しかし彼の姿をあえて簡潔に表現するならば、彼はほとんどの点で、ウェスパシアヌス<sup>(169)</sup>の子、ドミティアヌス<sup>(170)</sup>によく似ていた。ローマ人はこの人の邪悪さにひどく苦しめられたので、その体全体をバラバラにしても<sup>(171)</sup>、彼への憤りを晴らしたとは感じられなかったが、元老院はすでに、この皇帝の名がいかなる文書にも現れないことと、彼のいかなる影像も保存されないことを決議していた。[14] こうしてその名はローマにあるすべての碑文から、またたまたまそれが刻まれていたあらゆる箇所から、すなわち見ればわかるとおり、その名だけが文面から削除されたのである<sup>(172)</sup>。そして以下の理由による一つの銅像を除き、ローマ人の国から彼のすべての影像が撤去された<sup>(173)</sup>。[15] ドミティアヌスには気高く、また控え目でもある妻がおり、彼女はかつてこの世の何人も害したことがなく、その夫のいかなる行いにも悦に入ることはなかった<sup>(174)</sup>。[16] そのため当時、元老院は大いに愛されていた彼女を呼び出し、彼女に何なりとその望みを求めるように指示した。[17] 彼女が請うたのは、ドミティアヌスの体を引き取って葬り、彼の一つの銅像を彼女が望む場所に据える、ということだけであった。[18] 元老院はそれらを許容したが、妻はその夫を虐殺した人々の非道が後代に伝わるようにと考え、次のことを企てた。[19] すなわち彼女はドミティアヌスの肉体を集め、一つ一つを正確に、他の部分と適合するように配置し、体全体を縫い合わせた。そしてそれを彫刻家たちに見せ、銅像によってその不幸を忠実に表現するよう指示した。[20] そこで芸術家たちはすぐさま彫像を制作した。妻はそれを受け取ると、カピトリウム<sup>(175)</sup>に通じる道の、広場からそこへ行く際の右側に設置した<sup>(176)</sup>。それは今日にいたるまで、ドミティアヌスの姿および不幸を伝えている。[21] ユスティニアヌスの別の体と顔そのもの、とくに表情のあらゆる特徴がこの彫像の中に明示されていると、ある人は推測したであろう。

[22] この人はこのような姿をしていたが、私にはその性格を正確に語りつくすことはできない。と

いうのも、この人は悪をなすとともにたやすく誘導され、馬鹿かつ邪悪と人々から呼ばれ、出会う人に決して真実を話さなかったが、つねに欺瞞の心をもってすべてを話しそして行い、教唆する人々の言いなりに喜んでなったからである。[23] そして愚劣さと悪意とからなる、異常な混合のようなものが彼の中で生じた。おそらくこれは、かつてペリパトス派の哲学者の誰かが直言した、ちょうど色の混合のように、正反対のものが人間の性質の中にある、という事態であろう。[24] けれども私は今、自分が習熟する力のないことを記している。だがさらに言うならば、この皇帝は欺瞞的で当てにならず、怒りの面で暗く、二枚舌を操り、完璧にその見解を偽装する恐るべき人であった。また彼は喜びや悲しみの感情によらずに涙を流したが、これはその時々必要にこたえるための技術であった。彼は絶えず嘘を吐いたが、そこには必ず狙いがあった。実際、彼は取り決めに対して文書ともっとも恐るべき誓約を与えており、彼自身の家臣に対してもそうしていた。[25] だが彼は、その目前にある拷問への恐れから、秘密と誓ったことを白状してしまう最低の奴隷のように、その約束や誓約をすぐさま反故にしていた。[26] 彼は信用ならない友であると同時に無慈悲な敵であり、暗殺および金銭の熱烈なる愛好者であり、争い好きであると同時に異様な改革者であり、悪行にたやすく誘導される一方で、いかなる助言によっても善へは向かわず、また卑劣なことを思いついてはそれを素早くなし遂げる<sup>(177)</sup>一方で、善については耳に入れることすら疎ましく思っていた。[27] はたして人はユスティニアヌスの性格の本質に、言葉で到達しうるのであろうか。これらとさらにひどい多くの悪を、彼は明白に人の域を超えて有していたが、それはまるで、自然が他の人々からすべての悪意を取り除き、その男の魂の中に置いたかのようであった。[28] さらに他の悪にもまして、彼は非常に気楽に誹謗を聞いたが、処罰については俊敏であった。というのも、彼は何の調査も行うことなく決定を下していたが、人から誹謗を聞くやいなやその決定を公布することに決めたからである。[29] また彼は、村々の占領や、町々の焼却や、全民族の奴隷化を指示する文書を、何のためらいもなく書いていた。[30] 結果として、もし誰かがローマ人に生じたすべての不幸を最初のものから計量し、それらとこれらをつり合わせることを望んだな

らば、私が思うに、その男が引き起こした殺人はそれ以前のすべての時代に生じたものより多かったことを理解したであろう。[31] 彼は他人の金をひそかに得ることをまったくためらわなかったが、実際、彼は何の口実も必要とはみなしておらず、自分の所有物でないものに手を伸ばす際は正義の覆いのようなものを用意したのであった。だがそれらがいったん自分の物になると、彼はきわめて大胆になり、度を越した名誉心によってそれらを軽視し、何の理由もなく蛮族に与えた。[32] そしてまとめて言うならば、彼自身は金を持っておらず、また他の誰にもすべてを持つことを許さなかった。あたかも、彼は金銭欲に支配されていたのではなく、金を得た人々に嫉妬していたかのようであった。[33] 結果、彼はローマ人の地から富をたやすく追い出し、すべての人の貧困の造物主となったのである。

## IX章

そしてユスティニアヌスの性格は我々が示しうるかぎりではこのようであった。他方で彼はある女と結婚していたが、彼女がいかにして生まれ、育てられ、その男と結婚して一緒になり、ローマ人の国家を根本から破壊したかを、私が明らかにしよう。[2] ビザンティオンにはアカキオスという緑組に属する、猛獣ショーの猛獣の番をする人がおり、人々は彼を熊飼いと呼んでいた。[3] この男はアナスタシウスが皇帝権力を保持していたときに病で死んだが、3人の女の子ども、コミト<sup>(178)</sup>、テオドラ<sup>(179)</sup>、そしてアナスタシア<sup>(180)</sup>が後に残された。長女はまだ7歳に達していなかった。[4] だが寡婦となったその妻は別の男と同衾する仲となり、以後は彼が彼女とともに家計とその仕事の世話をするはずであった<sup>(181)</sup>。[5] しかしアステリオスという名の緑組の舞踊者は他の男から金で買収され、彼らをその職から退けたうえで、金を自分に渡した男を何の苦もなく彼らの地位に据えた。というのも舞踊者たちは、こうしたことを意のままに司る権限を有していたからである。[6] その女は、猛獣ショーにすべての人が集まったのを見たとき、花冠を娘たちの頭にかぶせ、またその両手にも持たせ、嘆願者として座らせた。[7] 緑組の人々はその嘆願をまったく受け入れようとしなかったが、青組の人々は、彼らの猛獣番が最近死んでいたため、彼らをその地位に据えた。[8] この娘たちが成熟すると、彼女らがみな美しい

容姿をしていたため、母親はただちに彼女らをかの地の舞台に立たせた。全員を同時にではなく、それぞれがこの仕事にふさわしく思われるほどに成長したときにそうしたのであった。[9]すでに長女のコミトは、同年代の娼婦らの中で抜きん出ている。だが次女のテオドラは、奴隷の子が着るような袖つきの小さな上着をまとい、姉にしたがって様々な仕事をこなす、姉が集まりの中で腰掛ける習わしとした台座をいつも肩ののせて運んでいた。[10]このときまだテオドラは成熟しておらず、男と一緒に寝ることも、女のやり方で交わりを持つようなことも決してなかった。だが彼女は、浅ましい人々と男のような淫らさで交わりを持った。すなわち彼女は奴隷を相手にしたのだが、彼らは主人に付き添って劇場に来て、たまたま与えられた機会にこの害悪をなしていたのであった。また彼女は娼館において、自然に反する肉体のその業に長く興じていた。[11]思春期に達し、ついに成熟するやいなや、彼女は舞台の女たちに混じり、まさしく古の人々が歩兵と呼んだところの娼婦となった<sup>(182)</sup>。[12]というのも、彼女はアウロス<sup>(183)</sup>も弾けず、ハープも弾けず、舞踏のたしなみすらなかったが、その春を通りがかる人々につねにひさぎ、体のすみずみまで働かせたからである。[13]その後、彼女は役者たちと劇場でのあらゆることで協力し、彼らの興行の一員となり、粗野で愚かなおどけをしては笑いを誘った<sup>(184)</sup>。実際、彼女は格別に機転のきく笑い種であり、すぐにこの仕事で称賛される存在となった。[14]その女には羞恥のようなものではなく、また誰も彼女が困惑する姿をかつて見たことがなかった。だが彼女は何の躊躇もなく恥ずべき行いをすすんでなし、顔を平手で打たれたりこめかみを叩かれたりすると冗談を飛ばして激しく噴き出すような女であった。また彼女は服を脱ぎ、出くわす人々に前も後ろも裸のまま見せつけたが、それらはしきたりでは男たちには見せず、隠すべきものであった。

[15]彼女は愛人たちに冗談を言いながらいつも怠惰に過ごし、交わりのさなかに淑女を装いつつ新奇な道具を持ち出しては、ふしだらな輩の魂を絶えず征服していた。というのも、彼女は出くわす男の誰かから誘われるべきとは考えず、逆に、彼女自身が出くわしたすべての者、とりわけまだあごひげもない連中に冗談を飛ばし、下品に尻を振っていたからである。[16]実に、これほどあらゆる快樂に弱

い人はかつていなかった。彼女はしばしば、肉体的強さの絶頂にあって交わりを事とする10人、あるいはそれ以上の若者たちと持寄りの宴席に出かけ、夕食仲間の全員と一晩中交わった。だが全員がその勤めに音をあげると、彼女は彼らの従僕のもとへ行き、おそらく30人はいたであろう彼らの一人一人と対になったが、それでも彼女はその肉欲を満たすことがなかった<sup>(185)</sup>。

[17]あるとき彼女はとある有力者の家に出かけたが、人が言うところでは、酒宴の途中、全員が酒を飲みつつ彼女を見つめる前で、彼らの脚が横たわる寝椅子の張り出しの部分に上り、その場で何の品位もなく衣服をたくし上げ、何の臆面もなくその淫らさを示した。[18]彼女は3つの穴を用いていたが、自然を非難し、そこで別の交わりを編み出すことができるよう彼女の胸の穴を今よりも広くすべきだと怒っていた<sup>(186)</sup>。[19]また彼女はしばしば妊娠していたが、ほとんどすべての技を用いてすぐに墮胎することができた<sup>(187)</sup>。

[20]また彼女はしばしば劇場においても、観衆の目の前で服を脱ぎ、彼らのまっただ中で裸になった。彼女は秘部および股間の周囲に腰布だけをまとったが、それは彼女が民衆にそれを見せることを恥じたからではなく、何人も股間に腰布を付けず、素っ裸の状態でそこに入ってはならなかったからである。このような格好をして、彼女は横たわり、背中を地面につけた。[21]するとその勤めをになっていた何人かの奴隷が大麥を彼女の秘部の上に撒き、それ専用を用意されたガチョウがくちばしでそこから一粒ずつついばんで食べた。[22]彼女は顔を赤らめることもなく立ち上がったが、その芸当を強く誇るかのようであった<sup>(188)</sup>。というのも、彼女はたんに恥知らずなだけでなく、万人の中でもっとも恥知らずな業をなす人だったからである。[23]しばしば彼女は服を脱いで舞台の真ん中に役者たちと立ち、弓なりに体を曲げて後ろを突き出し、彼女が慣れ親しんでいる格闘学校の技を、その経験がある人に対しても、またかかわりをまったく持たない人に対しても誇示した。[24]そうして彼女は自らの体をふしだらに酷使したため、まるで彼女の秘部は、他の女性と同様の自然の場所ではなく、顔にあるのかと思わせるほどであった。[25]それゆえ彼女と付き合う人々は、自然の法によっては交わりを持たないことを明らかにした。一方、彼女と広場で

出くわした上流の人はみな、彼女の服にわずかでも触れてその穢れをこうむるまいと思ひ、脇によけて急いで引き返した。[26] ほかにも実際、一日の始まりに見た人にとっては、彼女は凶兆の鳥であった。一方で彼女は、共演の女たちにはサソリのように残酷きわまるのがつねであった。彼女は激しい嫉妬を抱いていたからである。

[27] ティロス<sup>(188)</sup>の人エキボロス<sup>(189)</sup>が後にペンタポリス<sup>(190)</sup>の統治を引き受けたとき、彼女はもっとも恥知らずな奉仕をしつつ彼にしたがったのだが、かの地でその人に何か歯向かうようなことをして、すぐに彼から追い払われた<sup>(191)</sup>。その結果、彼女は必需品にすら事欠く窮状におちいり、以後、よく慣れたやり方で体を違法に用いることに決めた。[28] 彼女はまずアレクサンドリアへ行き、それから各都市で仕事に精を出しつつ東の全土をめぐり、ビザンティオンに戻った。神はその業の名を口にする人に決して優しくないように私は思うが、あたかも神霊（ダイモン）が、テオドラの淫らさを知らない土地があることに満足しないかのようにであった。

[29] このようにこの女は生まれ、育てられ、そして一般の女たちとすべての人の間で悪名高くなったのである。[30] だが彼女がビザンティオンに再び着くと、ユスティニアヌスは彼女に対して並々ならぬ愛情を抱いた。当初、彼は彼女を情婦として遇していたが、彼女をパトリキ<sup>(192)</sup>の地位に引き上げた。[31] するとテオドラはすぐに、並外れた権力と莫大な金を手に入れることに成功した。異常な愛にありがちなことだが、彼女はその男にとってすべての中でもっとも心地よきものであり、彼はこの情婦にすべての贈り物とすべての金を喜んで与えたからである。[32] 国家すらもこの愛の燃料となった。結果、彼は彼女とともに、かの地だけでなくローマ人の国家の全域で、いっそう多くの民衆を破滅させた。[33] というのも、彼らはいずれも古くから青組に属しており、その過激派に国家の諸問題への多大な権限を委ねたからである<sup>(194)</sup>。[34] しかしかなり後に、その悪の大部分は次のようなやり方で軽減された<sup>(195)</sup>。

[35] ユスティニアヌスは何日もの間病に倒れており、彼は死んだと噂されるほどの危険な状態におちいついていた<sup>(196)</sup>。しかし過激派は私が述べたような犯罪を起こしており、彼らは白昼のソフィアの聖堂<sup>(197)</sup>内でイパティオス<sup>(198)</sup>という平凡ならざる人を殺

した。[36] この悪事がなされたとき、それに起因する騒乱が皇帝<sup>(199)</sup>に知らされた。すると彼の家臣の各々は、ユスティニアヌスが不在であることを利用して、出来事の異常さをこの上なく誇張しつつ、起こったすべてのことを初めから報告した。[37] すると皇帝は都市長官に対して、事件全体への処罰を与えるよう命じた。それはひょうたん人々からあだ名された、テオドトス<sup>(200)</sup>という名の人であった<sup>(201)</sup>。[38] 彼はすべてを調べ上げ、犯罪者の多くを逮捕するとともに法にてらして処刑することに成功したが、多くの者が隠れて難を逃れた。[39] その間に、彼らがローマ人の問題を支配する定めだったからである<sup>(202)</sup>。一方、彼は突然、信じがたい回復を遂げると、すぐにテオドトスを呪術師および魔術師として殺そうと試みた。[40] だが彼は、その男を破滅させるために用いるいかなる口実も見出せず、男の幾人かの友人をきわめて厳しく痛めつけ、彼に対する真ならざる証言をするよう強いた。[41] みなが彼から遠くに立ち、テオドトスへの陰謀を黙したまま嘆く中で、いわゆるキエストルの職位を有するプロクロス<sup>(203)</sup>だけが、その男が罪について無実であり、死には決して値しないと宣告した。[42] そのためテオドトスは皇帝の決定により、エルサレムに送致された。だが彼は、自分を殺そうとする何者かがかの地に来ることを知って、聖域<sup>(204)</sup>に身を隠し、そうして残りの日々を過ごして死んだ。

[43] テオドトスに関することはこのように生じた。一方、過激派は以後、すべての人々の中でもっとも賢明になった<sup>(205)</sup>。[44] 彼らはもはやそうした犯罪を起こしていなかったからである。とはいえ、彼らはその生活においてより不安なく、不法な行いをなすことができた<sup>(206)</sup>。[45] その証拠は、彼らの中の数人が後に同じことを敢えてなしたとき、彼らには何の罰も下されなかったことである。[46] 実際、処罰の権限をつねに有する人々は恐るべき罪をなした人々に逃亡の自由を与えており、この同意によって彼らに法の侵害を促していたのである。

[47] さて皇妃<sup>(207)</sup>が生きている間、ユスティニアヌスはいかなる手に訴えても、テオドラを合法的な妻にすることができなかった。なぜなら、他のことでは一切異を唱えなかったにもかかわらず、彼女はこの点についてのみ彼に反対したからである。[48] この女は実際、邪悪さからほど遠いところにいたが、私が述べたとおり、きわめて粗野で、蛮族の生

まれでもあった<sup>(20)</sup>。[49] 彼女は統治に加わることは決してなく、国家の事柄には未経験のままであった。彼女は自らのものと名では、愚かしいと感じて宮廷には入らず、エウフェミアの通り名を名のった。だが後にこの皇妃は死去した<sup>(21)</sup>。[50] 一方、皇帝は極端に年老いて耄碌し、家臣らの物笑いの種となっていた。みな、彼が出来事を理解しないと、彼をひどく軽蔑し、無視したが<sup>(22)</sup>、ユスティニアヌスには多大な恐怖をもって注目していた。というのも彼はつねにすべてをかき回し、混乱に投げ、追い払い続けたからである<sup>(23)</sup>。[51] 彼はそのときにテオドラとの結婚を試みた。しかし元老院議員の地位にある者が娼婦と結婚することは不可能であり、以前からきわめて古い諸法によって禁じられていたため<sup>(24)</sup>、彼は皇帝に対し、それらの法を別の法<sup>(25)</sup>によって廃止することを強い、以後は正式な妻たるテオドラと同居し、他の誰もが娼婦と結婚することを可能にした。また僭主たる彼はすぐさま帝位に就き、取りつくろった言い訳によってこの乱暴な行いを隠した。[52] つまり、彼が叔父とともにローマ人の皇帝として是認されたとき、彼らは絶大な恐怖からその投票に導かれたのであった。[53] こうしてユスティニアヌスとテオドラは、友人の挨拶や平和の語りや許されない復活祭の3日前に、帝権を受け継いだ<sup>(26)</sup>。それから間もなくユスティヌスは病死して9年間の治世を終え、ユスティニアヌスだけが、テオドラとともに帝権を手にした。

## X章

こうしてテオドラは私が述べたように生まれ、育てられ、教育され、そして何の障壁にも遭わずに帝権をになう地位についた。[2] というのも彼女と結婚した男には、何か非道な行いをしたとの思いは生じなかったからである。彼は、ローマ人の国の全土から、またすべての女性の中から、もっとも高貴な生まれで人目に触れない育ちの女を、慎み深い振るまいに長じ、賢慮とともに暮らし、並外れて美しいばかりか処女でもあり、また屹然たる胸と呼ばれるものを持つような女を選び、その妻にすることもできたのだが。[3] しかし彼は、すべての人の共通の罪を自らのものとするに価値を見出し、先に明かされた行為にも臆することなく、自発的な墮胎により多くの嬰兒を殺し絶大なる穢れにまみれたその女とすすんで交わった。この男の性格について、私

は何かほかに述べる必要があるとは思わない。[4] というのもこの結婚は、彼の魂のあらゆる悲惨を十分に示すものであり、その性格の解釈者、証人、そして記録者ともなるから。[5] 過去の行いによる不名誉を当然のごとく無視し、出会う人々から不快とみなされる人にとって、通行不能の不法の近道などありはしないけれども、彼はいつも恥辱を額にのせ、たやすくまた何の苦もなく、もっとも汚れた行いに向かうのである。[6] 現に、元老院議員の誰一人として、この恥をかぶる国家を目の当たりにして、怒ろうともその行いを拒もうとも考えず、全員が彼女に対し、女神に等しいものであるかのごとくひれ伏した。[7] 司祭も誰一人として怒りをあらわにせず、同じことをしたが、彼らは彼女を女主人と呼ぶようであった<sup>(27)</sup>。[8] 以前彼女の観衆であった人々は恐るべき早さで、手のひらを返すように、自分たちが彼女の奴隷であること、またそう呼ばれることを望んだ。[9] テオドラの利益にそって危険な遠征におもむく定めとなっても、兵士の誰一人として怒らず、他の何人も彼女には齒向かわなかった。だが私が思うに、すべての人はこれらが彼らに授けられたものと感じ、その穢れの完成を許してしまったのである。あたかも運命がその力を見せつけたかのようにであり、人間の万事を統べる彼女にとって、なされることが適切かどうか、またそれが人々の理にかなうと見えるかどうかは、何の配慮にも値しなかった。[10] さて彼女は、多くの障壁がかかわるようであったけれども、突然ある男を、その理不尽な権力でもってひときわ重要な地位に昇進させ、その仕事の何にも反対しない。彼がありとあらゆる手段で彼女が任命した位置に導かれると、先を行く運命を前にして、すべての人は率先して場を譲って退く。だがこれらについては、神にとって好ましいようにさせ、またそのように語らせるのがよからう<sup>(28)</sup>。

[11] ところでテオドラは顔立ちがよく、他の部分も魅力的ではあったが、小柄で、過度にはないにせよ血色が悪く、青白かった<sup>(29)</sup>。その眼差しはいつも怖く、鋭かった。[12] 舞台での彼女の生活についてほぼすべてを語るのは、どれだけ時間があっても足りないであろう。だが私が先の叙述で選び出したいくつかの話は、この女の性格を後世の人に完全に明らかとするのに十分であろう。[13] ここで我々は、彼女とその夫がなしたことを手短かに明かさねばならない。というのも、二人はともに暮らしな

がら、何一つとして別々に行うことがなかったからである。[14] 実際、すべての人は長い間、彼らがその生活と必要な事柄に関して相互に正反対の立場を取るものと思っていたが、後にその印象そのものが、二人によって入念に作り上げられたものと認識された。すなわちそれは、家臣が団結して彼らに反抗しないよう、彼らに対する全員の意見を相違させるための方途であった。

[15] 私がすぐ後に述べるように、二人は最初にキリスト教徒を刺激し、論争において相対する方針を装うことで彼ら全員を反目させた<sup>(218)</sup>。[16] 次いで彼らは過激派を分断した。すなわち妻は全力で青組を支援する振りをし、彼らに敵対する過激派への権限を認め、彼らが無秩序に犯罪を起こしたりひどい狼藉を働いたりすることを許容していた。[17] 一方、夫は、困惑しひそかに憤慨するも妻に対して直に反抗することができない、というふうに装った。また二人はしばしば力の形勢を逆転させ、相互に反対の方向へ向かっていた。[18] というのも、夫が青組を犯罪者として罰すべきと判断すると、妻は、意に反して夫から屈服させられたと怒って不満を表したからである。

[19] けれども青組の過激派は、私が述べたように、ことのほか穏やかなようであった。彼らは、隣人たちを力のかぎり苦しめることを妥当とは考えなかったからである<sup>(219)</sup>。また裁判での競合においては、各々<sup>(220)</sup>が異なる側に肩入れするようであったが、両者のうちの不正な主張をした側が勝訴するのがつねであり、かくして彼らは係争者たちから財産の大半を奪ったのである<sup>(221)</sup>。[20] そしてこの皇帝は彼と親しい間柄の人々をとり立て、自由に乱暴を振るい彼らが望むままに国家を害せる位につけた。だが巨万の富を集めたと判断されるやいなや、彼らは何かしらの反抗をなしたとして、その妻との不一致を来たした。[21] 当初、彼はこれらの男をすすんで擁護すべきと見ていたが、後には、その人たちへの好意を忘れ、その熱意の点で唐突に気まぐれになった。[22] そして妻がすぐさま彼らに破滅をもたらす一方で、夫はなされることを見て見ぬ振りをし、彼らの全財産を恥知らずな方法でせしめていた。[23] こうした仕掛けにより、二人はつねに完全に一致しながら、表向きには対立を演出し、家臣を反目させると同時にその専制をきわめて強固なものにすることができた。

## 註

- (i) 『秘史』への言及は、『スーダ』のプロコピオスの項目にある。Cf. A. Adler, *Sudiae Lexicon. Editio stereotypa editionis primae*, 4 vols. (Leipzig, 1928-1938), p. 2479. 本論エビグラフの引用も同じ項目から。なお「アネクドタ」は、「未刊行の」を意味する形容詞。
  - (ii) J. Haury, *Procopii Caesariensis Opera Omnia, vol. 3: Historia quae dicitur arcana. Editio stereotype correctior, addenda et corrigenda adiecit* G. Wirth (Bibliotheca Teubneriana; Leipzig, 1963).
  - (iii) 『スーダ』は彼の職業を「弁論家およびソフィスト」(ῥήτωρ καὶ σοφιστής) と紹介している。A. Adler, op.cit., p. 2479.
  - (iv) ビザンツ期およびプロコピオスの時代のギリシャ語の発音については、G. Horrocks, *Greek: A History of the Language and Its Speakers*, 2nd ed. (Oxford, 2010), pp. 161-369, esp. pp. 231-233 を参照。
- (1) プロコピオス『戦史』のこと。この作品『秘史』と『戦史』との関係についてはA. Kaldellis, *Prokopios, The Secret History with Related Texts*, Indianapolis / Cambridge, 2010, p. xxvi (以下 Kaldellis 2010) を参照。ここで述べられるような叙述の方針は、ポリュビオスに倣ったものである。ポリュビオス『歴史』1. 1. 4 を参照。
  - (2) 『戦史』第8巻冒頭においてまったく同じ文言が用いられている。
  - (3) 『秘史』執筆はテオドラの死後になされたが、このときユスティニアヌスとベリサリオスはまだ存命であった。
  - (4) 出来事の原因を記す叙述法は、トゥキュディデス(例えば『歴史』1. 1. 23; 146) やポリュビオス(『歴史』3. 31) 等、古典作家の伝統の中に位置づけられる。
  - (5) Cf. Kaldellis 2010, p. lv.
  - (6) Cf. ポリュビオス『歴史』1. 1. 2; ディオドロス・シケリオテス『歴史叢書』1. 1. 5.
  - (7) セミラミス(サンムラマート)は、歴史上の存在としては紀元前9世紀のアッシリア王シャムシ・アダド5世の王妃であるが、ギリシャ神話においては、彼女はシリアの女神デルケートーとシリア人男性の間に生まれた子供で、バクトリアを征服しバビロンを建設したとされる(Cf. S. Hornblower / A. Spawforth eds., *Oxford Classical Dictionary*, Oxford, 1996<sup>3</sup>, p. 1383)。一方サルダナパロスは紀元前7世紀のアッシリア王アッシュールバニパルのこと(両者とも、クテシアスの断片中に記述がみられる)。皇帝ネロ(治世 54-68年)は、すでにタキトゥスとスエトニウスによって、暴君の典型として描かれていた。
  - (8) カルデリスやマラヴァルなど、多くの訳者はここまでを前書きとし、後の部分と区別している。
  - (9) ベリサリオス(ca. 500-565年)は帝国の将軍として多大な成果を挙げたが、それについてはA.H.M. Jones et al. eds., *Prosopography of the Later Roman Empire*, Cambridge, 1971-1992 (以下 PLRE) III A, pp. 181-224 を見よ。プロコピオスは彼の法律顧問かつ秘書であった。Cf. 『戦史』7. 1. 4-22.
  - (10) アントニナについては PLRE III A, pp. 91-93 を参照。彼女はしばしばベリサリオスとともに従軍し、とりわけ『戦史』「ゴート戦役」(第5-8巻)中にしばしばその名が現れる。

- (11) プロコピオスは自身の文体における古典的なスタイルに合わせて、「コンスタンティヌポリス」の代わりに「ビザンティオン」の語を用いている。
- (12) ローマ帝国において戦車競走はありふれたものであり、たいいての都市にはヒッポドロームがおかれていた。
- (13) ここでプロコピオスが用いている「劇場 *θυμέλη*」はしばしば侮蔑的なニュアンスを持ち、この時代では芸人達が利用する舞台を指した。
- (14) *φαρμακεύς* の訳。10世紀に編纂された『スーダ』における当該項目では、『秘史』のまさにこの節が引かれている。
- (15) その実践については本書 1. 13, 26; 2. 2; 3. 2 を見よ。
- (16) 両者の結婚は 531 年のこととされる。この結婚をめぐる周囲の状況について、詳しくは P. Maraval, *Procopé. Histoire Secrète*, Paris, 1990, p. 149, n. 16 (以下 Maraval 1990) を参照。
- (17) 息子が一人 (フォティオス、以下に登場) と娘 (『戦史』 4. 8. 24; 2. 7. 15) が一人知られている。
- (18) アリストファネス『平和』620より。本書 13. 3 も参照。
- (19) 教皇シルベリオス失脚の詳細について、プロコピオスは結局のところ語っていない。おそらくこの出来事は、彼が計画していた『教会史』に収められる予定だったのであろう (この問題については、A. Kaldellis, “The Date and Structure of Prokopios’ Secret History and His Projected Work on Church History,” *Greek, Roman, and Byzantine Studies* 49 (2009), pp. 585-616 を参照)。シルベリオスは 536 年 6 月にゴート王テオダハドによって教皇に任命されたが、翌年 3 月にベリサリオスとアントニナによって失脚させられた。『教皇の書 *Liber Pontificalis*』 LX によれば、シルベリオスは元コンスタンティノーブル総主教アンティモスの再任を退けた廉で皇妃テオドラに嫌われ、ローマ攻囲戦の際ゴート族と内通していたとの理由で廢位させられた。このときアントニナは宦官のエウゲニオスを用いて、大きな働きをしたとされる (本書 1. 27 を見よ)。この問題について詳しくは、Maraval 1990, pp. 149-150, n. 20。
- (20) ヨアンニスの破滅 (541 年) については『戦史』 1. 25。
- (21) ベリサリオスの養子テオドシオスについては PLRE III A, p. 1292 を参照。エウノミオス派は、キジコス主教エウノミオス (在位 360-361 年) に端を発する宗派で、父なる神と子の非相似 (アノモイオス) を説いた。この教義はすでに 4 世紀末から非難を受けた (とりわけ 381 年のコンスタンティノーブル公会議や『テオドシウス法典』 XVI, 5, 6, 8, 31, 32) が、6 世紀にも信者が確認される。
- (22) ヴァンダル族に対する戦争のため (533 年 6 月)。プロコピオスは北アフリカを指す際、つねに「リビア」の語を用いている。
- (23) エウノミオス派の再洗礼は、381 年のコンスタンティノーブル公会議決議第 7 条に定められている。『戦史』 3. 12. 2 によれば、遠征への出港前に、他の兵士たちも総主教エピファニオス (在位 520-535 年) によって洗礼されている。
- (24) 533 年 9 月から 534 年中頃の間のある出来事。カルタゴにおけるベリサリオスの活動については『戦史』 3. 20 および 3. 23。
- (25) ベリサリオスの莫大な富について、ここで初めて言及がなされる。おそらく彼はアントニナと共謀して、帝国の国庫から富を詐取していた (Cf. 本書 4. 33-34)。
- (26) 「ズボン *ἀναξυρίδες*」はおそらくイラン諸語を起源に持ち、オリエントやガリア、スラブの人々が身につけるあらゆる種類のズボンを指した。Cf. A. Brzóstkowska, “‘Anaxyrides’ u Prokopa z Cezarei na tle greckiej i rzymskiej tradycji literackiej,” *Eos* 68 (1980), pp. 251-265 [p. 265 にフランス語の要約]。
- (27) Maraval 1990, p. 150, n. 25 は、このベリサリオスのあっさりとした対応を、こうした出来事の日常性に由来するものと考えているが、むしろここでは、夫を籠絡するアントニナの術 (本書 1. 12 を見よ) にその理由を求めてもよからう。
- (28) 535-536 年にかけての冬。『戦史』 5. 5. 19 を見よ。
- (29) コンスタンティノスはベリサリオス旗下の将官の一人。対ゴート戦役において活躍した。PLRE III A, pp. 341-342 を参照。
- (30) コンスタンティノスはかつてプレシディオスという名のローマ人から 2 本の高価な短剣を盗んでいた。537-538 年の冬にローマでプレシディオスからの訴えを聞いたベリサリオスはコンスタンティノスに短剣を返還するよう命じるが、彼はそれを拒否する。ベリサリオスはコンスタンティノスを召喚するが、暗殺を恐れた後者はベリサリオスを殺害しようとして捕まり、後に死罪となった。プロコピオスは『戦史』 6. 8. 18 において、この処置をベリサリオスの「唯一の浄ならざる行い *μόνον οὐχ ὅσιον ἔργον*」と評するが、そこではアントニナのかかわりはまったく見出すことができない。
- (31) アントニナの息子フォティオスは、義父であるベリサリオスの庇護のもと、軍事・政治の両面でキャリアを積んだ (Cf. 『戦史』 5. 5. 2-5; 5. 10. 5-20)。詳細は PLRE III A, pp. 1037-1039。
- (32) 1 ケンテナリウムは百ローマ・ポンドに等しく、1 ポンドは金貨 72 枚、さらに金貨一枚は 4,55 グラムである。従って百ケンテナリアは金貨 720,000 枚、重さにして 3,276 キログラムとなる。この出来事の信憑性については、Kaldellis 2010, p. 9, n. 24 を見よ。
- (33) 540 年末。
- (34) プロコピオスがこのような回りくどい言い方 (*τὸς μοναχοὺς καλουμένους*) をしていることについて、マラヴァル (Maraval 1990, p. 151) やマイヤー & レピン (O. Veh / M. Meier / H. Leppin, *Anekdotia. Geheimgeschichte des Kaiserhofs von Byzanz*, Düsseldorf / Zürich, 2005, S. 286) は、この表現が純粹にプロコピオスの擬古文調の文体に引きずられたものであって (古典語の「*μοναχός*」に「修道士」の意味はなかった)、プロコピオスがキリスト教と距離とおいていたことを示すものではないと説明している。
- (35) 541 年初頭。ササン朝ペルシャの王ホスロー 1 世 (治世 531-579 年) は 532 年に締結された平和条約を破って東方属州を荒らし、アンティオキアを占領した (本書 2. 25)。
- (36) アントニナが夫ベリサリオスに帯同した例としては、ペルシャ国境 (『戦史』 1. 25, 20)、アフリカ (『戦史』 3. 12. 2; 3. 13. 24; 3. 19. 11)、イタリア (『戦史』 5. 18. 43; 6. 4. 6; 7. 19. 7; 7. 28. 4) など。
- (37) この称号は名譽的なものに過ぎない。
- (38) 541 年におけるベリサリオスのペルシャ侵攻については『戦史』 2. 16-19 をみよ。ヨアンニスの破滅については『

- 史』1. 25。
- 39) 本書1. 14を参照。
- 40) シサウラノンの要塞は小アジア南東部、ニシピス（現在のヌサイピン）の近郊。攻略は541年のこと。
- 41) 『戦史』2. 19. 26-46で挙げられている理由は、ティグリス川を渡ったアレタスの部隊がしばらく引き返してこなかったこと（以下を参照）、ベリサリオス軍が熱病に悩まされていたこと、そしてシリア出身の兵たちが彼らの故郷をペルシャ軍に奪われるのではと怖れていたことである。
- 42) 本書1. 3を参照。
- 43) ガッサーン朝の王アレタス（アル・ハリス・ブン・ジャバラ、Cf. PLRE III A, pp. 111-113）は、ローマ帝国と同盟してペルシャ軍と争った。プロコピオスが『戦史』2. 19. 26-29で伝えるところでは、アレタスはティグリス川を渡った後に手に入れた戦利品を独占するために、ベリサリオスの元に戻らなかった。
- 44) ササン朝ペルシャの首都であるクテシフォンは、バビロンの北方60キロ、ティグリス川東岸に位置する。
- 45) 『戦史』2. 14によれば、ホスローは前年（540年）にアンティオキアを占領したとき、多くの捕虜をクテシフォン近郊のある都市（「ホスローのアンティオキア」と呼ばれた）に移住させた。
- 46) ササン朝の君主カワード1世（治世484-497、499-531年）のこと。
- 47) 現在のグルジア。かつてこの地にはコルクス王国（?-前164年）というグルジア系の国家が存在した。
- 48) ペトラはラジキ（現在のグルジア）の王国内にある黒海沿岸の要塞で、ローマ軍の支配下にあった。「ペトラ」の名は、かつて港だったこの地をユスティニアヌスが要塞化した際（535年より前）、彼が与えた名前である（『新勅法』28）。ホスローはこの地を541年に占領した（『戦史』2. 18. 9）。
- 49) プロコピオスはペルシャを指すに際し、古典期の用例に倣って「メディア」の語を用いている。
- 50) 『戦史』2. 15. 32-34, 2. 17. 1, 2. 29. 24-25を参照。
- 51) この疫病は、541年にエジプトで発生したばかりのいわゆる「ユスティニアヌスのペスト」とは無関係である。ペルシャ軍の災難については『戦史』8. 7. 4も参照。
- 52) ナベディスはササン朝の最高位の將軍の一人（PLRE III B, p. 909）。
- 53) ニシピスはかつてユリアヌスの遠征が失敗した後、363年からペルシャの支配下にあった。『戦史』2. 18-19によれば、ベリサリオスはニシピスの駐屯部隊には勝利したが、その都市を攻略しようとはしなかった。
- 54) プリスハミス（Cf. PLRE III A, p. 234）とペルシャ人部隊はその後、ローマ軍の一部としてゴート戦役に参加した（『戦史』2. 19. 25, 7. 3. 11）。
- 55) アルメニアはこのときすでに独立した王国としては存在せず、テオドシウス1世（治世379-395年）以降ローマとペルシャによって分割されていた。
- 56) バレリアノス（Cf. PLRE III A, pp. 1355-1361）はかつて北アフリカとイタリア遠征に参加していたが、この第2次ペルシャ戦役の際にアルメニア方面軍の司令官 *magister militum per Armeniam* に任命された（541-547年）。
- 57) この休戦協定は532年に結ばれた（ホスローがそれを破ったのは540年）。
- 58) ペルシャの高官で外交官でもあったザベルガニスは、ホスローの外交政策において重要な役割を果たした（『戦史』1. 23. 25-26; 2. 26. 16-19）。『秘史』で言及されるテオドラの書簡の真正性については判断しがたい。
- 59) ホスローの帰還は541年秋のこと（『戦史』2. 15. 17）。
- 60) ベリサリオスの帰還（おそらく541/542年の冬季）については『戦史』2. 19. 45-46にも言及があるが、アントニナのことについては触れられていない。
- 61) 「カリゴノス」は典型的な宦官の名前である。この人物は本書3. 5, 3. 15, 5. 27にも登場している。
- 62) エフェソスの聖ヨハネ教会は、4世紀以降名声を博していた。ユスティニアヌスは自らの治世にそこの古い建物を壊して、新たに巨大なバシリカを建造させている。『建築』5. 1. 4-6を参照。
- 63) 教会は基本的にアジュール権を持つてはいたが（Cf. 『勅法彙纂』1. 12）、しばしば侵害されたのは周知のとおりである。
- 64) アンドレアスは後にコンスタンティノーブルで開かれた教会会議に参加している。
- 65) ベリサリオスは541-542年の冬季をコンスタンティノーブルで過ごしている。『戦史』2. 19. 49では、プロコピオスは、ベリサリオスを東方前線から呼び戻したのは皇帝であったと述べている。
- 66) ベリサリオスは大規模な私兵部隊 (*bucellarii*) を持っていたが、その数は540年には7,000人にのぼった（『戦史』7. 1. 20）。プロコピオスはここで「槍兵 *δορυφόροι*」と「盾兵 *ύπασπισται*」という表現を用いているが、これは古典的な用法である（とくに後者は、紀元前のマケドニア軍を想起させる）。
- 67) 名譽的な称号にすぎない。
- 68) 皇妃に対する典型的な賞賛表現。
- 69) テオドシオスは542年か543年に死亡した。
- 70) このような私的な牢獄は、ユスティニアヌス自身が529年に禁止している（『勅法彙纂』9. 5. 2）。
- 71) おそらくこれは、金角湾に面したブラヘルネのテオトコス教会である。『建築』1. 3. 3, 1. 6. 3によれば、ここはユスティニアヌスによって装飾された。
- 72) ハギア・ソフィア（現在のアヤ・ソフィア）のこと。この聖堂は、元々は4世紀、コンスタンティウス2世によって建立されたが、現在残るのは、2度の焼失を経て532年から537年にかけてユスティニアヌスが再建したものである。
- 73) 本書17. 10を参照。
- 74) 聖ゼカリヤは洗礼者ヨハネの父。
- 75) 修道士となったフォティオスが再び史料に現れるのは、ユスティニアヌスが死んだ後のことである。『テオフィアニス年代記』A. M. 6058では、彼は皇帝ユスティヌス2世（治世565-578年）の命によって、エジプト教会での混乱を解決するためにそこへ派遣されている。
- 76) プロコピオスがキリスト教的な意味で神に言及するのはここが初めてである。本書4. 42, 4. 44, 5. 38, 18. 3, 28. 13とも比較せよ。
- 77) 『戦史』2. 20-21によれば542年。1度目は540年5月、2度目は541年春のラジキ侵攻である。
- 78) 541年秋にエジプトで発生したこの疫病は、542年5月頃にコンスタンティノーブルに到達し、4か月の間に約30万もの死者を出したとされる（『戦史』2. 23. 1; ヨアン

- ニス・マララス『年代記』482)。
- (79) ハウリに従って ἐπιτροπέωσιν と読む。マラヴァルはコンパレッティに従って ἐπιστορέωσιν を採用している (Maraval 1990, p. 156, n. 2)。
- (80) ペトロス (PLRE II, pp. 870-871) はペルシャ支配下のアルザネネ (アルメニア) 出身。幼い頃ユスティヌス1世 (治世 518-527年) によって捕らえられて教育をほどこされた後、彼の秘書官を経て将軍に任命される (『戦史』2. 15. 7)。
- (81) 「大食漢」ヨアンニス (PLRE III A, pp. 665-667) についてはよく分かっていないが、541年と543年の遠征に参加し (『戦史』2. 19. 15, 2. 24. 15)、また東ゴート王トティラに対するイタリア遠征にもその名がみえる。
- (82) ローマの将軍。PLRE III A, pp. 254-257 を参照。
- (83) ブジスは530年以降、しばしば東方前線に将軍として派遣されている。530年のベリサリオス支援 (『戦史』1. 13. 5)、539年のアルメニアで起こった反乱の鎮圧 (『戦史』2. 3. 28)、そして541年には再びベリサリオスを支援している。541年の戦闘の際、彼はベリサリオスと東方軍の指揮権を二分していた。
- (84) ブジスはテオドラの死後、549年にランゴバルド戦役に参加したほか (『戦史』7. 34. 40)、554年には再び将軍として、ラジキにいた (アガティアス『歴史』2. 18, 3. 8)。
- (85) マルティノスについては PLRE III B, pp. 839-848 を参照。
- (86) 『戦史』2. 21. 34 でプロコピオスが語るころでは、ベリサリオスはイタリア遠征のために皇帝によって呼び戻されたのだが、しかしその遠征は544年まで実現しなかった。
- (87) つまりベリサリオスの私兵部隊。本書3. 5と註を参照せよ。
- (88) ベリサリオスの法律顧問であったプロコピオスも、彼との接触を禁じられた一人であったと思われる。
- (89) カップドキアのヨアンニスの没落 (541年) については、本書1. 14, 2. 15、および『戦史』1. 25を参照。
- (90) つまり皇妃は金貨216,000枚を没収したことになる。
- (91) ゲリメル (PLRE III A, pp. 506-508) は北アフリカのヴァンダル王 (治世 530-534年)。彼は2度の敗戦と包圍戦の後ベリサリオスに降伏した。
- (92) ウィティギス (PLRE III B, pp. 1382-1386) はイタリアの東ゴート王 (治世 536-540年)。彼はその治世すべてをイタリアでのローマ軍との戦いに費やし、ついにはベリサリオスに降伏してラヴェンナを引き渡した。
- (93) アナスタシオス (PLRE III A, p. 63) はテオドラの娘孫 (ユスティニアヌスの娘ではない)。彼とヨアンニナとの関係については、本書5. 18-24を見よ。
- (94) ἄρχων τῶν βασιλικῶν ἵπποκόμων / comes sacri stabuli.
- (95) 544年のこと。この戦争は、東ゴートが新たな王トティラ (治世 541-552年) のもとで立ち直ったこと、そして数年前に帝国を襲ったペストの影響で兵士雇用に問題が生じていたこともあって、順調に進まなかった。ベリサリオスは自身の直属部隊を東方に残したままであったので、トラキアで新たに4,000人の兵を雇用した (『戦史』7. 10. 1-3)。
- (96) カルデリスは、人々がベリサリオスによるクーデタを期待していたのではないかと推測している。Kaldellis 2010, p. 22, n. 61.
- (97) このときベリサリオスはまだ50歳にもなっていなかった。
- (98) 本書3. 30と比較せよ。またプロコピオスは『戦史』7. 13. 14-18においても、544年のイタリア遠征におけるベリサリオスと関連させて、この「神の敵意」という考えについて説明している。
- (99) ベリサリオスの最初のイタリア遠征について述べられている。ベリサリオスは東ゴート王テオダハド (治世 534-536年) とウィティギス (治世 536-540年) に対し、大胆かつ無謀とも呼べる戦略戦術で勝利した。
- (100) いくつかの節で、プロコピオスは神と運 (テューケー) という二つの考えを混ぜ合わせている。例えば本書10. 9-10や『戦史』8. 12. 34-35を参照。
- (101) 『戦史』7. 35. 1 (544-549年の出来事)。
- (102) 東ゴート王トティラ (治世 541-552年、PLRE III B, pp. 1328-1332) はイタリア半島のほとんどをローマの支配から取り戻した。しかし最終的に、彼は552年のタギナエの戦いで敗北し戦死した。この敗北によって東ゴートは事実上イタリアにおける領土を失い、翌年滅亡した。
- (103) 帝国はローマにおける支配を546年12月に失ったが、547年4月にベリサリオス軍の攻撃によって取り戻した (『戦史』7. 20-24)。
- (104) ローマ軍の将校だったイロディアノス (PLRE III A, pp. 593-595) はベリサリオスに同行して535年のイタリア遠征に参加した。彼は545年にスポレットが東ゴートによって攻略されたとき、そこの守備隊長だった。彼は30日以内に救援が来なければ降伏すると約束して、実際そうした。プロコピオスは彼とベリサリオスとの確執について『戦史』7. 12. 16で述べている。イロディアノスは552年、ゴート軍側にその存在が確認される。
- (105) ビタリアノスは513年に皇帝アナスタシオスに対して反乱を起こし、520年に宮廷で、おそらくユスティニアヌスの命令で殺害された。本書6. 27-28を参照。
- (106) PLRE III A, pp. 652-661 を参照。
- (107) ユスティヌス1世の甥で、かつユスティニアヌスの従兄弟であるゲルマノス (?-550年) は、この時点で文武の両面において抜きん出たキャリアを積んでいた。彼は最初の妻パッサラとの間に二人の息子 (ユスティノスとユスティニアノス) と一人の娘 (ユスティナ) をもうけた。彼は『戦史』7. 31-32で語られる皇帝ユスティニアヌス暗殺計画に反対している。
- (108) 後にヨアンニスと結婚することになる彼女については、PLRE III A, pp. 742-743.
- (109) ビタリアノスの甥ヨアンニスは、その軍事的なキャリアのほとんどをイタリアでの戦闘に費やした。ベリサリオスによる彼の派遣については『戦史』7. 12を参照。
- (110) ヨアンニスは翌年546年にイタリアへ戻った。プロコピオスは『戦史』7. 25. 22でヨアンニスとベリサリオスの不仲について述べている。
- (111) ヨアンニスは南イタリアからローマへ進軍せよとのベリサリオスの命を拒否した (『戦史』7. 18. 29)。このこともあって、ローマは546年12月に陥落した。
- (112) 『戦史』7. 35. 2を参照。
- (113) ヨアンニナとアナスタシオスの婚約については、本書4. 37を参照。
- (114) 違法の理由として考えられるのは、テオドラが娘の両親に同棲の許可を取り付けていなかった、その娘が (当

初は) 望んでいなかった、またおそらく彼女がまだ法的に結婚可能な年齢(12歳)に達していなかったことである。

- (115) 548年のこと。『戦史』7.30.25を参照。
- (116) 本書2.13および3.30を参照。
- (117) セルギオスについてはPLRE III B, pp. 1124-1128を参照。
- (118) セルギオスは543年、トリポリの軍事指揮官に任命された。安全保障の宣誓をおこなって、彼はレウアテ人(北西アフリカに住むムーア人の一部族)をレプティス・マグナ(トリポリの東130キロ)で開かれた宴会に招待したが、逃げおおせた一人を除いて全員を殺害した。セルギオスはレウアテ人を戦闘で倒したが、戦争は544年に入っても続き、彼の叔父であるソロモンが死んだ(『戦史』4.21)。ソロモンの甥であるセルギオスは北アフリカの統治者に任命されたが、その話題は『戦史』4.22で語られている。
- (119) 『戦史』4.21.4でプロコピオスは、「言われるところでは」と前置きして、レウアテ人が邪念を抱いてベリサリオスに接近したと語っている。この『秘史』で彼は、その「真相」をさらけ出したわけである。
- (120) ソロモン(PLRE III B, pp. 1167-1177)は北アフリカ戦役(533-534年)においてベリサリオスに仕え、その地域を統治した(534-536, 539-544年)。プロコピオスは『戦史』4.20.33で彼の勇気と知恵を讃えているが、実際のところ彼は兵士たちからは不人気だったようである(Kaldellis 2010, p. 26, n. 82)。
- (121) このヨアンニス(PLRE III A, pp. 640-641)は539-544年にかけてアフリカにおける将軍職にあった一人。
- (122) アレオピンドス(PLRE III A, pp. 107-109)は545年にアフリカにおける将軍職にあったことが確認される。
- (123) 『戦史』4.23.32を参照。元老院議員のアレオピンドスは、セルギオスと北アフリカにおける軍事指揮権を分割するため545年にやって来た。
- (124) カルデリスは孫娘とする一方、マラヴァルは娘としている。
- (125) セルギオスの叔父のソロモンとは別人。
- (126) ピガシオスは裕福な医者であったとされるが、プロコピオスの著作によってしか知られていない。PLRE III B, pp. 987-988を参照。
- (127) (セルギオスの兄弟の)ソロモンは、(セルギオスの叔父の)ソロモンが死んだ544年の戦闘でムーア人に捕らえられていた。彼はヴァンダル人を装い、ピガシオスによって身請けされた(『戦史』4.22.12-20)。
- (128) 皇帝レオ1世(治世457-474年)のこと。
- (129) ベデリアナは当時バルカン半島中央部にあったDacia Mediterranea州にあり、その位置は現在のスコピエ近郊だったとされる。
- (130) 後の皇帝ユスティヌス1世(治世518-527年)のこと。他の史料には、彼をトラキア族と呼ぶものもある(例えばマララス『年代記』17)。
- (131) おそらく、レオ1世が創設したとされるexcubitoresと呼ばれた部隊を指している。
- (132) 皇帝アナスタシウス1世(治世491-518年)のこと。
- (133) アナスタシウスの前帝ゼノ(治世474-475, 476-491年)はイサウリア(小アジア南部)の出身で、他のイサウリア出身者たちの多くを高位官職に就けていた。アナスタ

シウスの政策はイサウリア出身者を冷遇するものであったために、491年から498年にかけて大規模な反乱が勃発した。

- (134) このヨアンニスについてはPLRE II, pp. 617-618を参照。
- (135) ユスティヌスはこのときすでにduxの職に就いており、軍司令官magister militumであったヨアンニスの副官としてこの戦争に参加していたと思われる。
- (136) 後世の著作家の中には、この幻視をアナスタシウス自身に帰している者もいる(ゾナラス、ケドレノス)。
- (137) とはいえ、直前の記述(6.5)によれば、ヨアンニスは翌日、つまり最初の夜が明けた後にユスティヌスを処刑するつもりだったとある。
- (138) ユスティヌスを救ったこの幻視は、当時の奇蹟譚に典型的なやり方(3回の登場、次第に執拗になる命令など)で語られている。
- (139) 正確な年は不明だが、ユスティヌスは少なくとも515年には近衛長官comes excubitorumであった。
- (140) ユスティヌスは518年7月10日に帝位に就いた。彼の登極にいたる経緯はやや複雑である。アナスタシウス帝の元で聖室長官praepositus sacri cubiculiであった宦官アマンティオスは、自分の甥であるテオクリトスを皇帝にしようと画策していた。アマンティオスはユスティヌスに、テオクリトスを支持するために各方面にばらまく目的で資金を預けるのだが、ユスティヌスはこの資金を、自らを皇帝とするために利用して周囲の支持を取り付けたのである。ユスティヌスは即位後、アマンティオスやテオクリトスを殺害したが、彼らは単性論の支持者であり、信仰の面でもユスティヌスと対立していたとされる。
- (141) 66歳(『復活祭年代記』a.518)か68歳(マララス『年代記』17)。
- (142) プロクロス(PLRE II, pp. 924-925)は522/523-525/526年までキエストルκοιναίστωρ(=クァエストルquaestor sacri palatii)の職にあった。この職はもともと財務にかかわるものだったが、6世紀には法の起草や法廷での裁定を担う重要官職の一つであった。
- (143) この人々はprimarius a secretisと呼ばれた。
- (144) ラテン語で「LEGI」となる。
- (145) 帝国文書局では偽造を防ぐために、皇帝文書に独特な書体を用いていた(『テオドシウス法典』9.19.3)。皇帝は専用の赤紫色のインク(encaustum sacrum imperatorum)を使用していた。
- (146) LupicinaはLupa(オオカミ女)の指小形であり、売春婦を指す一般的な言葉だった。彼女は夫ユスティヌスの帝位登極後、その名をエウフェミアに変えている(本書9.49を参照)。
- (147) 後の皇帝ユスティニアヌスは、ユスティヌスの姉妹とサッパティオスという名の男(本書12.18を参照)の間に生まれた。ユスティニアヌスは、ユスティヌスの出身であるベデリアナ近郊にあったタウリシオン出身で、後にその場所にユスティニアナ・プリマという都市を建設した(『建築』4.1.17-28)。
- (148) 第21-24節は、ユスティニアヌスに対する『秘史』の主要な非難を要約している。
- (149) 彼についてはPLRE II, pp. 67-68および本書6.11の註を見よ。
- (150) コンスタンティノーブル総主教ヨアンニス2世(在位

- 518-520年) のこと。
- (151) ビタリアノスは513年にアナスタシウス帝に対して反乱を起こし、ユスティヌスの治世には帝国軍総司令官 *magister militum praesentalis* の職にあった。彼は520年、宮廷で暗殺された。本書5.7も参照。
- (152) 青組 (Βένετοι) と緑組 (Πράσινοι) は帝国各地で活動し、とりわけコンスタンティノープルで大きな政治的役割を担った団体 (応援団) であった。両者はさまざまな舞台芸者を雇って、多くの都市で見せ物を提供した (本書1.11や9.2-8を参照)。民衆は主としてこれら2つの党に分かれてはいたが、積極的に活動していたのはわずかだったとされる。団員たちは派手な身なりをし、馬車競技等で自らのチームを応援し、ときに乱暴や犯罪に走り、さらには皇帝の政策に抗議して反乱を起こすこともあった。532年に発生し、皇帝ユスティニアヌスを逃亡寸前にまで追い込んだニカの乱はそのもっとも有名なものである (『戦史』1.24)。青組と緑組の構成員について、かつては貴族層 (青) と商工業者 (緑)、正教徒 (青) と単性論支持者 (緑) といった説が存在したが、現在では支持されなくなってきている (例えばテオドラは青組支持者でありつつも単性論者であった)。さしあたりP. マラヴァル (大月康弘訳) 『皇帝ユスティニアヌス』白水社、2005年、27-31頁およびA. Cameron, *Circus Factions: Blues and Greens at Rome and Byzantium*, Oxford, 1976を参照。
- (153) ここで「過激派」と訳した「στασιώται」は、「騒乱を起こす人々」と「団員」の二重の意味で用いられている。
- (154) 本書9.43-44および10.19も参照。
- (155) マララス『年代記』17.18における次の記述と比較せよ。「彼 (皇帝ユスティニアヌス) は全ローマ帝国の都市に大いなる秩序をもたらした。即ち彼は全都市に勅令を発して、どの応援団に属そうとも、殺人や騒乱を起こした者は罰せられるべき事とした。その結果、以後いかなる騒乱を起こす者もいなくなった」(和田廣訳)。
- (156) 古代ローマやギリシャの伝統においては、髪は短く保つことが望ましいとされた。紀元4-5世紀にかけて活躍したプロトマイス司教シネシオスは、彼と同時代のほとんどの人が髪を短くしていると述べている (シネシオス『禿頭賞賛演説 *Calvitii encomium*』14)。プロコピオスが語る6世紀前半においても、髪を長くすることはおそらく反社会的な性格を持っていた。
- (157) マッサゲタイ人は紀元前6世紀から紀元前1世紀ごろまで存在したとされる遊牧民族で、カスピ海とアラル海の間に住んでいたと推測される。古くはヘロドトス『歴史』第1巻に記述があり、そこではアケメネス朝との抗争が描かれている (なお、Kaldellis 2010, p.33では、「ヘロドトスによれば、マッサゲタイ人はスキタイ人の一種であった」と説明されているが、これは不正確である。ヘロドトス自身は両者を明確に区別している。『歴史』1.201以降を参照)。プロコピオスはこの名前を、おそらくフン人を指して用いている。
- (158) 普通の市民に対して武器の携帯は禁止されていた。
- (159) つまり都市長官 *praefectus urbi* を指している。彼は都市における刑事裁判と秩序維持に責任を負っていた。
- (160) 行政機構の混乱がほのめかされている。
- (161) ボスフォラス海峡を挟んだアジア側を指している。
- (162) ユスティヌス1世を指している。彼の愚かさについては、本書9.50も参照。
- (163) 527年のこと。
- (164) ユスティニアヌスが帝国領域への不可侵のために蛮族に支払った金銭が、結局は逆の効果を及ぼしていることをプロコピオスは非難している (同様の批判が、本書11.5-11、19.13-17および『戦史』第8-9巻に見られる)。一方でマララスは、皇帝のプロパガンダ的な見解を反映して、こうした政策が蛮族をキリスト教に改宗させるためであったと述べている (マララス『年代記』第18章を参照)。蛮族に金銭を支払うというこの政策はユスティニアヌスに始まったものではなく、すでにレオ1世やゼノ、アナスタシウスなども行っていたのであり、またユスティニアヌスが蛮族全体に支払った年額は多くとも当時の国家歳入の2パーセント以下であった。Cf. C. D. Gordon, "Subsidies in Roman Imperial Defence," *Phoenix* 3 (1949), pp. 60-69.
- (165) ユスティニアヌスによる、首都沿岸部の建築については『建築』1.5-9および1.11を参照。
- (166) プロコピオスは本書においてしばしば財産没収に触れている (11.40から12.12, 16.10, 17.4-5, 19.11-12, 20.17, 21.5, 26.16, 27.25)。
- (167) つまりユスティニアヌス。
- (168) 比較としてマララス『年代記』第18章冒頭の叙述を挙げておく。「…皇帝の容姿は以下のとおりである。背丈は幾分低めで、胸幅は厚く、鼻筋が通り、色白で、ちじれ毛で、丸顔で、身体全体の均整は取れていて、頭髮は薄く、顔立は整い、頭髮と顎には白髪が混じっていた」(和田廣訳)。こうした体質の描写とその叙述の伝統については、Kaldellis 2010, pp. xxxvii-xxxviii を参照。
- (169) ローマ皇帝ティトゥス・フラウィウス・ウェスパシアヌス (治世69-79年) のこと。
- (170) ローマ皇帝ティトゥス・フラウィウス・ドミティアヌス (治世81-96年) のこと。
- (171) ドミティアヌスの身体がバラバラにされたと述べるのはプロコピオスのみである。ドミティアヌスの同時代人であるスエトニウスは、『皇帝伝』8.17においてドミティアヌスが彼の乳母フィリスによって火葬されたと述べている。
- (172) 歴史家たちはこの記憶の抹消を一般にダムナティオ・メモリアエ *damnatio memoriae* と呼んでいる。ここで記されるドミティアヌスの事例については、さしあたり福山佑子「政治手段としてのダムナティオ・メモリアエー「悪帝」ドミティアヌスの形成」『西洋史論叢』30 (2008)、13-27頁を参照。
- (173) 実のところ、いくつものドミティアヌスの胸像などが現代に伝わっている。
- (174) ドミティアヌスの妻ドミティア・ロンギナは、ドミティアヌス暗殺の共謀者であったとする史料も存在するが、しかしこれは非常に疑わしい。
- (175) 現在のカンピドリオ (あるいはカピトリーニ) の丘を指す。
- (176) この詳細な記述から、おそらくプロコピオスは536-538年の遠征でペリサリオスについてローマを訪れた際、現物 (あるいは何らかの彫像) を見たのであろう。
- (177) トゥキュディデス『歴史』1.70.3より。本書13.33および『戦史』3.9.25も参照。
- (178) コミト (PLRE III A, p.329) は528年に将軍 *magister*

- militum / στρατηγόςのシタス (PLRE III B, pp. 1160-1163) と結婚した。
- (179) テオドラの出自をローマ (ビザンツ) 帝国とする同時代の歴史家はプロコピオスのみである。単性論派の史料では彼女の出身地をシリアのカリニコス (現在のラッカ) とする一方 (Michel le Syrien, *Chronique II*, éd. J.-B. Chabot, Paris, 2001, pp. 419-420)、パフラゴニア (*Scriptores originum constantinopolitanarum I*, hrsg. Th. Preger, Leipzig, 1901, III, 93) やキプロス (ニキフォロス・カリストス・クサントプロス『教会史』: Migne, *Patrologia Graeca* 145, 16, 37) とする史料もある。しかしいずれも決定的とはいえず、たしかなのは彼女が下層民の出自であることだけである。
- (180) PLRE III A, p. 60 を参照。
- (181) このような職業の世襲は広く行われた慣行であった。
- (182) 古代の喜劇では、娼夫／婦を指す際に「歩兵 *ἐταίρα*」の語がしばしば用いられた。
- (183) 主としてダブルリードの木管楽器。演奏者はしばしば娼夫／婦だった。
- (184) ポルナスと呼ばれる劇場があり、そこでは喜劇的な見せ物が、とりわけコンスル就任の際に上演された (『新勅法』105, 1)。
- (185) Cf. B. Baldwin, “Sexual Rhetoric in Procopius,” *Mnemosyne* 40 (1989), pp. 150-152.
- (186) この節はプロコピオスのレトリックがよく現れている箇所の一つである。詳しくは Kaldellis 2010, p. liv を参照。
- (187) 少なくとも1回は失敗しているようである。本書17. 16 を参照。
- (188) ここでテオドラが演じているのは、ギリシャ神話におけるレダと白鳥のエピソードかもしれない。神話においては、白鳥に変身したゼウスとレダが交わり、彼女が産んだ卵からヘレネが生まれている。
- (189) 現在のレバノン南部。
- (190) PLRE II, p. 528 を参照。彼の名はこの作品にしか出てこない。
- (191) 現在のリビアにあった属州の一つ。
- (192) 本書12. 30 以下を参照。
- (193) 宮廷での最高位の称号。この時代では何の行政上の任務も負っていない。
- (194) 本書10. 16-18 では、彼らの青組への最良が帝国統治上の戦略であったことが語られている。
- (195) 以下に続く話は、第9章の本筋であるテオドラとは関係がない。
- (196) これはユスティヌス治世の523年の出来事である。
- (197) この聖堂は、ニカの乱で焼失する前の、最初のものである。
- (198) イパティオスについては、ここでしか言及がない。
- (199) つまりここでは皇帝ユスティヌスのこと。
- (200) テオドトスについては PLRE II, pp. 1104-1105.
- (201) カルデリスを始めとする他の訳者たちはみな、ここで我々が「ひょうたん」と訳した *κολοκύνθιον* を「かぼちゃ pumpkin / citrouille / Kürbis」と訳している。確かに現代ギリシャ語でこの語に対応する *κολοκύθι* は「かぼちゃ」を意味するが (詳細は P. Chantraine, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, Paris, 1977, p. 557 を参照)、しかし6世紀において、おそらくかぼちゃという農作物はローマに伝来していなかったと思われる。10世紀に帝国で編纂された農業書『ゲオポニカ』12. 19では、*κολοκύνθος* の栽培について説明があるが、そこで扱われているのは明らかにひょうたん (ユウガオ) である。『ゲオポニカ』の詳細な検討をおこなった J. コーダーもまた、当該の語を *Flaschenkürbis* と訳している (J. Koder, *Gemüse in Byzanz. Die Versorgung Konstantinopels mit Frischgemüse im Lichte der Geoponika*, Wien, 1993, S. 35)。
- (202) 第39節の最初の一文は非常に混乱しており、様々な修正が提案されている。ここでは Dewing の案を採用した。
- (203) プロクロスについては本書6. 13 を参照。
- (204) テオドトスが逃げたのは、おそらくエルサレムの復活教会である。
- (205) 過激派の沈静化は、おそらくユスティニアヌスの共同皇帝登位と結びつけられるであろう。
- (206) 本書7. 3-4 および10. 19 も参照せよ。
- (207) ユスティヌスの后エウフェミア (ルピキナ) のこと。
- (208) 本書6. 17 を参照。
- (209) 死亡年は不明である。
- (210) 本書8. 2-3 も参照せよ。
- (211) アリストファネス『平和』320、『騎士』692 から。
- (212) 例えば『学説彙纂』22. 2. 44 (Paulus) (紀元前18年)、『勅法彙纂』5. 27. 1 (紀元336年); 5. 5. 7. 2 (紀元454年)。
- (213) 『勅法彙纂』5. 4. 23.
- (214) ユスティニアヌスは527年4月1日に、宮廷でユスティヌスによってアウグストゥスと宣言された。そして3日後の4月4日、復活祭の日には彼は総主教によって戴冠された。
- (215) ユスティニアヌスとテオドラが主張した呼称については、下記30. 25-26 を参照。
- (216) プロコピオスの神と運命に対する見方については、本書4. 42, 45 を参照。
- (217) 『建築』1. 11. 8においてプロコピオスは、彼女の美貌について言葉で表現することや、彫刻にとらえることは不可能であろうと述べている。
- (218) 本書27. 13 を参照。プロコピオスは彼の時代の主要な神学論争、つまりカルケドン公会議 (451年) をほのめかしている。『戦史』5. 3. 5-9においてプロコピオスは、彼自身にとってこうした論争がばかげたものであることを明らかにしている。
- (219) 青組の過激派の自制については上記7. 3-4 および9. 43-44 を参照。
- (220) ユスティニアヌスとテオドラ。
- (221) マラヴァルは、この一文を本章22節の後ろに置くことを提案している (Maraval 1990, p. 169)。